

中尾根遺跡

平成 7 年度県営圃場整備事業原村西部
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

長野県原村教育委員会

1996.3



なか お ね い せき
中 尾 根 遺 跡

平成 7 年度県営圃場整備事業原村西部
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1996.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が中尾根遺跡

序

八ヶ岳西麓に位置する原村では、村の基幹産業たる農業の合理化と生産性向上が求められており、これにともなう県営圃場整備事業が大規模に進められています。また当地を含めた八ヶ岳西南麓は遺跡の宝庫・縄文のふるさととして全国的にも著名であり、古くから注目を集めてきました。

今回報告する、中尾根遺跡は「平成7年度県営圃場整備事業原村西部地区」内に存在しており、諏訪地方事務所の委託と国・県からの補助金の交付を受けて原村教育委員会が緊急発掘調査を実施したものです。

調査では、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることがわかりました。検出した遺構は縄文時代前期末葉から中期中葉の竪穴住居址28軒、小竪穴179基、平安時代の竪穴住居址5軒、建物址1棟、墓壙1基で、それらに伴う数多い遺物が出土しております。

今回の調査にあたり、諏訪地方事務所土地改良課各位、室内区及び実行委員会各位、地元地権者の方々のご理解・ご協力、長野県教育委員会のご指導をはじめ発掘にかかる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、炎天下でご苦労された作業員の皆様により、失われていく貴重な文化財を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申しあげます。

平成8年3月

原村教育委員会

教育長 大館 宏

例　　言

- 1 本報告は「平成7年度県営圃場整備事業原村西部地区」に先立って実施した長野県諏訪郡原村室内に所在する中尾根遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国庫および県費から発掘調査補助金交付と、長野県諏訪地方事務所の委託を受けた原村教育委員会が、平成7年5月22日から12月18日にかけて実施した。整理作業は、平成8年1月4日から3月25日まで行った。
- 3 遺構の実測は、平林とし美・石川美樹・坂本ちづる、写真撮影は、平出一治・平林とし美・石川美樹が行った。遺構写真は調査担当者が撮影した。
- 4 執筆は、平出一治が行った。
- 5 本調査の出土遺物、記録などはすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係資料には、55の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、丸山敏一郎・小平和夫・原明芳・武藤雄六の諸氏に御指導・御助言をいただき厚く御礼申し上げる次第である。

目　　次

例　　言	
目　　次	
I 発掘調査に至る経過	1
II 発掘調査の経過（抄）	2
III 遺跡の位置と環境	6
IV グリッド設定と調査方法	8
V 土　　層	10
VI 遺構と遺物	12
VII ま　　と　め	30
引用参考文献	
発掘調査団名簿	
報告書抄録	

I 発掘調査に至る経過

農村地域はどこでも同じであろうが、後継者がいないことから高齢化は進むばかりである。だからと云って仕事量が少なくなることはない。したがって、機械化を望む声は強まるばかりである。その機械力を増すためには、農地と農道の整備が必要となる。それが原村における圃場整備事業である。

原村の柏木・菖蒲沢・室内の3地区に跨って計画された「県営圃場整備事業原村西部地区」内には、国の史跡である阿久遺跡をはじめ大小様々な遺跡が点在し、当地方においては最も遺跡が密集する地域である。それらの遺跡の保護については原村役場農林課と協議を続けてきたが、平成4年9月8日に行われた長野県教育委員会の「県営圃場整備事業原村西部地区にかかる埋蔵文化財の保護について」で、具体的な協議がはじめられた。しかし、遺跡の範囲および性格等が不明瞭な遺跡ばかりであり、適切な結論を導き出すことはできなかった。その席上、遺跡範囲確認調査の実施が検討されたが、すでに平成5年度に村教育委員会で計画している緊急発掘調査は広範囲におよぶものであり、その調査の終了さえ危惧される状況にあり、大きな問題を残したままであった。出席者は長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、地元委員会、原村教育委員会の5者である。

その後も協議を行うが、遺跡の範囲および性格等が不明瞭なため、いずれの協議でも適切な結論を導き出すことができないままであり、進展することはなかった。協議にあたりすこしでも多くの資料を得るために、平成5年6月26日に長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、地元委員会、原村教育委員会の5者により、県営圃場整備事業計画地内の踏査を行ったが、満足するような資料を得ることはできなかった。

平成7年度の実施計画に基づく保護協議が具体的となり、村教育委員会では数度にわたり踏査を行うが、やはり満足のいく資料を得ることはできないままである。したがって、数少ない資料をたよりに平成6年6月20日と7年5月12日に、原村役場と現地で行われた



第1図 原村域の地形断面模式図（宮川一中尾根遺跡一赤岳ライン）

長野県教育委員会の「平成7年度県営圃場整備事業原村西部地区にかかる埋蔵文化財保護協議」で協議された。

遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいことであるが、はじめに記したように農業者からは強い要望があり、「記録保存やむなき」との結論に落着き、緊急発掘調査を実施し記録保存をはかる方向で同意をみることができた。出席者は長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、地元委員会、原村教育委員会の5者である。

原村教育委員会は、国庫および県費から発掘調査補助金交付をうけ、また、諏訪地方事務所から緊急発掘の委託をうけ、平成7年5月22日から12月18日にわたり中尾根遺跡の緊急発掘調査を実施した。

II 発掘調査の経過（抄）

平成7年5月22日 発掘の準備をはじめる。

6月1日 機材の搬入を行う。

5日 グリッド設定をはじめる。

6日 グリッド設定を行い、範囲確認を目的としたグリッド調査をはじめる。

22日 グリッド調査を行い、遺跡は分布図より東側に拡がっていることを確認するが、上物があるため明日から調査を一時中断する。

8月6日 調査を再開する。重機で表土剥ぎをはじめる。

22日 B地区から遺構の検出作業をはじめる。また、南側の水田に重機でトレンチ掘りを行うが、僅かな縄文時代中期の土器破片が出土したが、すでに水田造成で遺物包含層は破壊されていた。

23日 遺構の検出作業を行い、住居址、小堅穴の埋没を確認する。

9月5日 C地区の東端で検出した住居址を便宜上第1号堅穴住居址と呼び、検出順に番号を付することにする。

7日 遺構の検出作業を行い、重複する第1～4号堅穴住居址検出状態の写真撮影を行う。

8日 遺構の検出作業を行う。南側水田（西方）のトレンチ調査では遺構を確認するまでに至らないことから土捨て場とする。

11日 遺構の検出作業、小堅穴1～3の検出状態の写真撮影を行う。

12日 風の強い一日。遺構の検出作業、第10号堅穴住居址検出状態の写真撮影を行う。

- 18日 第7～9号・第11～15号竪穴住居址、小竪穴5検出状態の写真撮影を行う。
- 20日 第16・19・20号住居址検出状態の写真撮影を行う。遺構の精査をはじめる。
- 21日 小竪穴6～8、新しい溝状遺構検出状態の写真撮影を行う。また、南側水田（東方）のトレンチで遺構の検出作業をはじめる。
- 25日 遺構の検出・精査、埋土の観察と写真撮影などを行う。
- 26日 遺構の検出・精査、精査が終了した小竪穴の写真撮影をはじめる。
- 27日 第6・10・17号竪穴住居址などの埋土観察、第1号竪穴住居址などの遺物出土状態の観察と記録を行う。
- 28日 遺構の検出・精査などを行う。
- 10月3日 遺構の検出・精査などを行い、第10号竪穴住居址遺物出土状態の観察と記録を行う。
- 16日 小竪穴61で柱痕を認めるが、季節の関係ですでに太陽の傾きが著しく、写真撮影には不向きで残念であった。
- 18日 撥乱穴と考えていた落ち込みから人骨が出土したため、墓壙1（近世）と呼び精査を行う。
- 19日 遺構の検出・精査などを行う。
- 25日 遺構の検出・精査などを行う。遺物の出土状態などから小竪穴28は平安時代の墓壙であることを確信する。
- 26日 遺構の検出・精査、第16号竪穴住居址の炉内埋設土器の観察と記録などを行う。
- 11月1日 遺構の検出・精査を行い、遺物の取上げ、実測をはじめる。
- 6日 遺構の検出・精査・遺物の取上げ・実測などを行い、柱痕を確認している小竪穴61の写真撮影を再度行うが良好な成果は得られない。
- 7日 遺構の精査・遺物の取上げ・実測などを行い、炉埋設土器（埋甕炉）と炉石の取上げをはじめる。
- 10日 遺構の精査・遺物の取上げ・実測などを行う。
- 12月1日 遺構の検出・精査・遺物の取上げ・実測などを行う。
- 5日 遺構の精査・遺物の取上げ・実測などを行い、B地区検出小竪穴群の写真撮影を行う。
- 8日 遺構の精査・遺物の取上げ・実測などを行う。C地区では工事がはじまる。



第2図 中尾根遺跡の位置と付近の遺跡

表1 中尾根遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見 ○は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文		弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早							
1	家 羹	○		○				○			昭和59年度発掘調査
2	大久保 前							○			昭和54年消滅
3	向 尾 横	○	○	○					○	○	昭和54年度発掘調査
4	横 道 下								○	○	昭和54年度発掘調査
9	比 丘 尼 原			○					○		
10	柏 木 南	○		○							昭和50年度発掘調査
11	阿 久 沢	○	○	○	○	○	○	○	○		昭和50~54・平成5年度発掘調査
12	前 沢			○					○		昭和55・61年度発掘調査
13	長 蜂		○	○	○	○	○	○	○		平成3年度発掘調査 消滅
14	裏 長 蜂	○		○	○	○	○	○	○		平成3年度発掘調査 消滅
15	程 久 保			○	○	○	○	○	○		○ 平成4・5年度発掘調査 消滅
17	白 ケ 原		○	○				○			昭和53年度発掘調査
18	前 尾 根 西			○							昭和51年一部破壊
19	南 平			○							
20	前 尾 根				○	○			○		○ 昭和44・52~54・59年度発掘調査
21	上居沢尾根					○				○	○ 平成4年度発掘調査
22	清 水										
23	思 唐	○		○	○	○	○	○	○		昭和62・平成5・6年度発掘調査
24	思 唐		○		○	○	○	○			昭和62年度詳細分布調査
25	裏 尾 根			○							
26	家 宮				○			○			昭和59年度発掘調査
27	間 虚				○			○			昭和62年度発掘調査
28	宮				○				○		
42	居 沢 尾 根		○		○	○	○	○	○		昭和50~53・56・平成6年度発掘調査
43	中 阿 久 山				○				○		昭和51年度発掘調査
44	原				○				○		昭和51年一部破壊
45	広 原 日 向	○			○	○	○	○	○		昭和58年度発掘調査
46	宿 尾	○			○	○	○	○	○		平成5・6年度発掘調査 消滅
47	ヲ シ キ 木		○	○	○			○	○		昭和51年度発掘調査
48	櫟 の 石			○					○		昭和53年一部破壊
49	大 和 神	○		○	○	○	○	○	○		○ 昭和50・平成4・5年度発掘調査
50	山 の 神				○	○	○	○			昭和54年度発掘調査
51	姥 ケ 原				○	○	○	○			昭和63・平成元年度発掘調査
52	水 桥 平				○				○		
53	雁 頭 泥				○				○		○ 昭和54・57・63・平成4・5年度発掘調査
54	宮 ノ 下		○	○					○		○ 昭和57・58年度発掘調査
55	中 尾 根				○	○	○	○	○		○ 平成7年度発掘調査
56	家 前 尾 根				○	○	○	○	○		○ 昭和51年一部破壊、平成7年度発掘調査
57	久 保 地 尾 根					○					○ 昭和51年一部破壊、平成6年度発掘調査
58	判 の 木								○		
87	下 原 山 南		○	○					○		昭和63・平成元年度発掘調査
88	下 原 山 北		○		○	○	○	○	○		昭和63・平成元年度発掘調査
93	大 石 西			○	○						平成3年度発掘調査
95	土 井 平								○		平成4年度発掘調査 消滅

- 13日 遺構の精査・遺物の取上げ・実測などを行う。並行して片付けをはじめる。
- 18日 第2～4号竪穴住居址の精査と実測を行う。今日で現場作業は終了する。

III 遺跡の位置と環境

中尾根遺跡（原村遺跡番号55）は、長野県諏訪郡原村11,620番地付近に位置する。

このあたりは八ヶ岳西麓のほぼ中央に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根が数多くみられる。それらの尾根上から南斜面には第2図および表1に示したように、縄文時代を中心とした数多い遺跡が埋蔵されている。その一つである本遺跡は、阿久川と大早川に挟まれた尾根上から南斜面に立地するが、南の阿久川までは80m程で、比高差は10m前後を測る。南の水田で実施したトレンチ調査では、度重なる氾濫で生じたと思われる川砂の厚い堆積が観察でき、水田造成以前には荒れること多かったようである。

地理的には、県道神ノ原・青柳停車場線から南方に150m程入った室内区公民館の南東に接しており、室内区のほぼ中央に位置している。

付近一帯は水田であり、言い換えるならば水田地帯の中に本遺跡だけが取り残された状況である。本遺跡が立地する尾根は単独で比較的小規模であるが小高いもので、人力による水田造成においては手を付けることはできなかったようで、水田造成による遺跡破壊は免れてきたように思えるが、南斜面の一部と北斜面の一部は水田造成と農道の建設すでに削平され遺跡は破壊されていた。

調査地点の標高は972m前後を測り、裾野に密集点在する遺跡群のなかにあっては中位の標高である。なお、原村における縄文時代遺跡の高度限界は1200m前後である。

尾根の幅は東が狭く西に寄るほど広くなるが、圃場整備事業の対象地域は東側の約半分程度であり、尾根幅が狭い馬の背状の所が多数を占めている。地目は農道、普通畑、水田であるが、庭木（一位）の苗木が植えられていた畑地は、繰返し掘られたローム層に達する深い穴が所々でみられ。また、傾斜の強い畑地では表土の流失が容易に考えられる状態で、ロームを粉碎し耕作土としている所が広範囲でみられるなど遺跡の保存状態は良くなかった。

圃場整備事業から外れた西側は普通畑と室内公園であるが、尾根幅は広くなり公園部分で70m程を計る。公園には赤松の老木があり、古くから憩いの場として親しまれてきたようである。

本遺跡についての記録がみえるのはそう古いことではなく、昭和48年から諏訪清陵高等

学校地歴部考古班が実施した分布調査の報告書に縄文時代中期後葉から後期初頭の土器破片と磨製石斧、平安時代の土師器破片を採集したことを伝えているのが最初である。しかし、本調査では、住居址の埋土は著しく搅乱しており、すでに発掘調査を実施したと思われる住居址を検出した。地主の小平実氏の話によると「何時のことか覚えていないが、原学校で発掘した。」とのことであるが、残念なことに記録などは残されていない。

長くなるが、諏訪清陵高等学校地歴部考古班の調査記録を紹介しておきたい。

中 尾 根 遺 跡

△ 地勢・環境

室内区を南へ下がると、小高い丘の上に公園がある。本遺跡はこの公園からこの丘を南側に降りた平地まで広がっている。日当たりは極めて良好である。

△ 遺物

土器

図97は縄文後期の土器で、特徴としては摩消縄文が左下の一角を占め

幅約5mmの隆帯がその上を走っている。隆帯上にはキャタピラ文様があり、これは多少ながらも右側に傾いている。また、隆帯の横には直径1cmのドーナツ状の粘土板がはりつけられている。この土器片の上下部が外側にそっていることから口頸部であったと思われる。

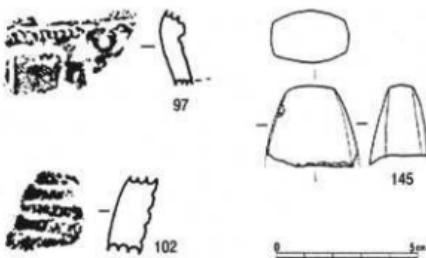
図102は曾利I式土器で、約5mmの間隔で沈線を入れられているのが特徴である。含有物は、長石、石英、少數の黒雲母で、土器の表面はかなり摩滅している。その他、縄文中期、土師器と思われる土器破片が得られた。

石器

図145の磨製石斧が一つ採集された。刃部と身部をだいぶ欠いている。たいへん厚い石斧である。磨痕は表面が変化しているためわからない。石質は蛇紋岩である。

△ まとめ

縄文時代中期末葉から後期までを中心とする珍しいパターンの遺跡である。又この遺跡でも土師器が発見されたことを考えると、原村における平安時代の遺跡の広さがうかがえる。

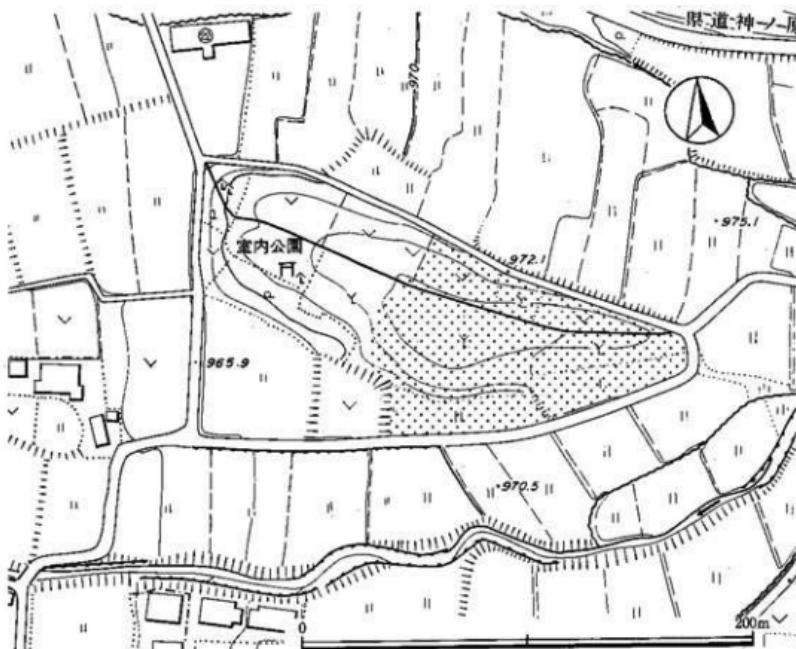


第3図 土器・石器（『土』8）より

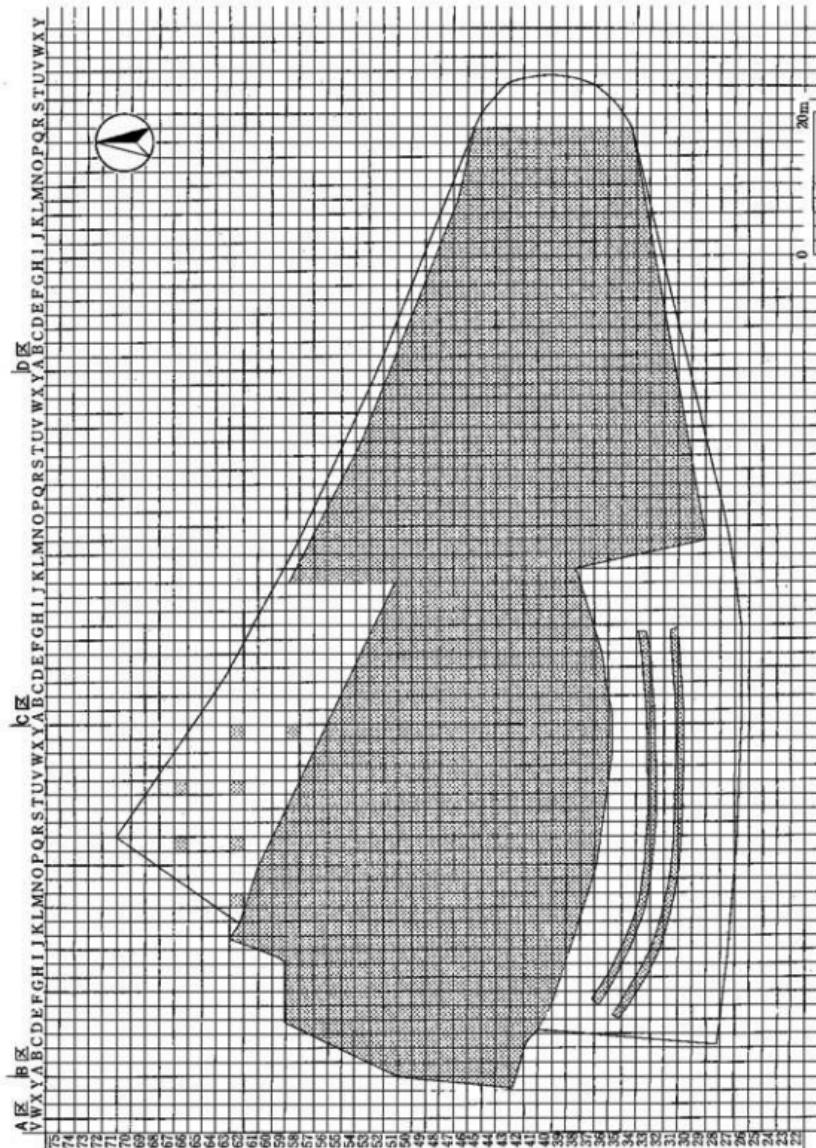
その後、昭和54年度に長野県教育委員会で実施した八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査や、村誌編纂の折りに行なった分布調査でも縄文時代中期の土器破片を採集し、遺跡の範囲は不明であったが採集した土器と石器からみて集落遺跡であると考えられていた。

IV グリッドの設定と調査方法

発掘調査の対象は第4図に示したように、平成7年度県営圃場整備事業原村西部地区にかかる遺跡の全域におよんでいる。調査に先立ち第5図のとおり、東西南北(磁北)に軸を合わせたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、圃場整備予定地を西からB地区、C地区、D地区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに 2×2 mの小地区(グリッド)に分割し、東西方向は西からA~Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中央と思われるラインを便宜的に50と呼び、そのラインを基準とし南方向は49・48・47というように、南に行くにし



第4図 発掘調査区域図・地形図 (1:2,500)



第5図 クリッド配置図 (1 : 800)

たがい小さくなるように、北方向は51・52・53と大きくなるように振分けた。

個々のグリッドの呼び方は、たとえば第5図左上の2×2mの調査グリッドでみると、大地区はB地区であり、小地区の東西方向はQラインにあたり、南北方向は66ラインであるから、「Q-66」である。小地区的前に大地区的「B」を表記した「BQ-66」がグリッド名となる。

予定地には調査を進める上で障害になる作物、庭木、物置小屋などがありまだ片付けられていないままであった。調査期間の関係で遺跡の範囲確認調査は手掘りでグリッド発掘に着手したが、障害物が多く思うような成果を上げることができなかつたため、作業を一時中断し片付けを待った後にグリッド発掘を再開している。遺跡の範囲がほぼ明らかになった時点では重機による表土剥ぎをはじめ、引き続き人力で遺構の検出作業を行った。

発掘調査は、原則としてローム層の上面まで層位別に行つた。調査面積は5,410m²である。遺物は遺構に伴うものは遺構別、伴わないものはグリッド別に取り上げている。

測量は、予め設定した2m四方のグリッド杭を基準としたやり方の方式による。

V 土 層

調査では、尾根上から南斜面で住居址と小竪穴を検出しているが、尾根上と南斜面では層序に違いがみられた。尾根上は比較的安定した層序を示すところもみられたが、総体的には地山のローム面に達する耕作が著しく良くなかった。斜面では土の流失が容易に考えられる不安定な状態であり、耕作土は薄くその直下がローム層になる範囲は広く、傾斜の強い所はロームを粉碎して耕作土としている状況で最悪であった。

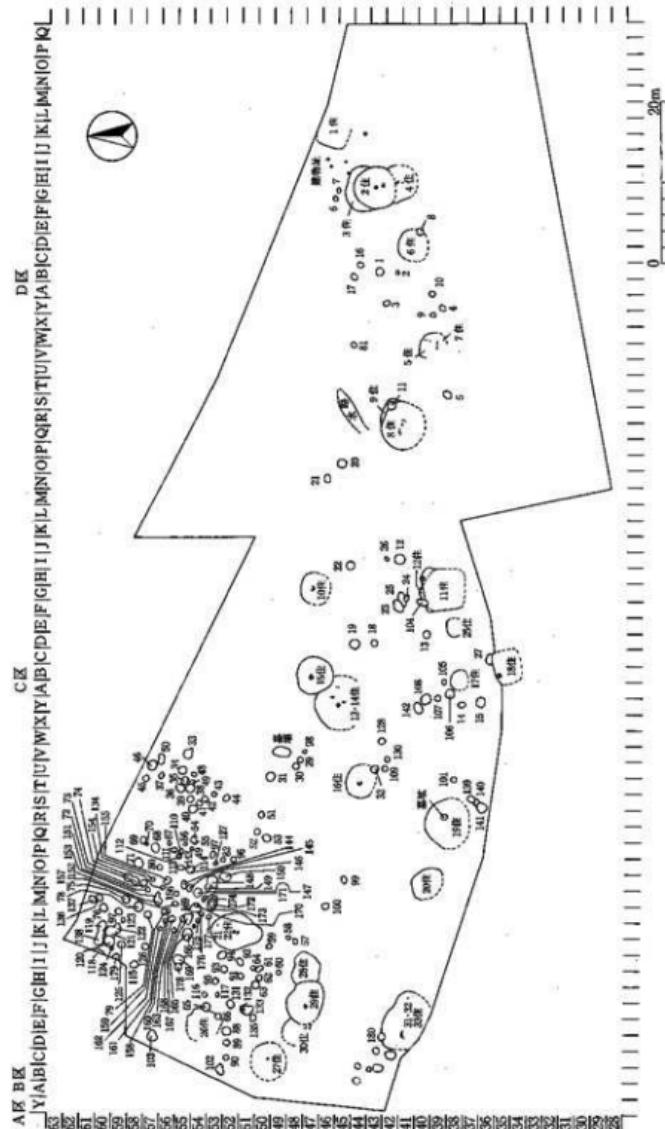
尾根上のB地区は、地山のローム層までは深く安定していたが、C地区からD地区においては東に寄るに従い浅くなり、耕作土の直下がローム層になる箇所は広く、ローム層までが削平されている所もみられた。B地区の南斜面はローム層までは深いが、庭木（一位）の苗木が植えられていたこともあり、その擾乱は極めて著しくローム層に達しており最悪であった。C地区からD地区の南斜面は斜度が強く、耕作土の直下がローム層になる箇所、ロームを粉碎した耕作土がみられるなどやはり最悪である。

層序が比較的安定していたB地区的尾根上を基本層序としたが、おおまかな観察結果を記しておきたい。

第I層 黒褐色土 表土層・畑の耕作土、厚さは畑によってまちまちで8~15cmを計る。

第II層 黒褐色土 第I層よりしまっている。厚さは15~20cmを計り、ローム層までが深い箇所はこの層が厚く堆積している。基本的には南斜面も同様であるが、土の流失によるため厚さはまちまちである。

第6図 造林配置図 (1:700)



第Ⅲ層 黄褐色土 しまっており第Ⅱ層とほぼ同様の堅さであり、尾根上の平坦部でみられただけであるが、厚さは2~15cmを計る。

第Ⅳ層 褐色土 いわゆるローム漸移層である。

第Ⅴ層 ソフトローム

VI 遺構と遺物

1 住居址

本調査で検出した竪穴住居址は第6図に示したように33軒を数えるが、大きくは縄文時代と平安時代に分けることができる。縄文時代は前期最末から中期中葉、平安時代は後期に帰属するものである。住居址の帰属する時代は表2の通りである。

検出時には、その落ち込みの状態から竪穴住居址と認定したが、精査を進めた結果、竪穴住居址に確定する決め手は無く23と24は搅乱穴のため欠番とした。検出時においては、重複が把握できなかったが、精査を進める過程で重複を認めたものは第A号・第B号竪穴住居址とした。

なお本文中でカッコ付けの数値は、重複ないしは流失した住居址の現存部分を示している。

表2 時代別竪穴住居址

縄文時代	平安時代	欠番
2・3・4・A・B、6、7、8、9、10、13・14、15、16、17、19、20、21・22、25、26、27、28、29、30、31、32、33	1、5、11、12、18	23、24

第1号竪穴住居址（第6図、写真3）

遺跡の東端にあたるDJ-45~47、DK-45~47、DL-46の7グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われるが、農道の下からの検出したものすでに破壊された範囲は広く、西壁と床面の一部を確認しただけであり明確なことはわからない。

自然傾斜の東西方向で土層観察を行った。埋土は薄い上に農道の輪道による搅乱で不明瞭であるが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。なお、焼土と炭化材の包含量が極めて多く、廃絶の原因は火災によるものと思われる。

竪穴住居址はローム層中に構築されている。大きさは長軸(360)cm、短軸(360)cmで、

壁はすでに流失し、また破壊された所が多く西壁が僅かに残存しただけで、立ち上がりは普通であるが低い。床面はやや東に傾斜しているが堅いタタキ床で良好である。なお、床面には農道（輪道）による搅乱が達している。周溝は壁直下にみられ、東壁際にピットが並ぶが性格は不明である。西壁際の大きなピットは住居址の埋土とほぼ同様で、廃絶時には開口していたものと思われ貯蔵穴と考えておきたい。北西隅のピットから鉄斧が出土した注目される資料になろう。カマドはすでに破壊された範囲に構築されていたためか確認できなかった。

遺物は少ないが、平安時代後期の土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品がある。

鉄製品は図示していないが、鉄斧1点がありピットから出土した。

第2号・第3号・第4号・第A号・第B号竪穴住居址（第6・7図、写真4・5）

南斜面のDF-42~45、DG-41~45、DH-41~45、DI-41~44の18グリッドに跨る竪穴住居址である。検出した縄文時代の住居址の中では東端に位置し、そこは馬の背状の狭い尾根の南急斜面にあたるが極めて複雑な重複関係がみられた。調査の不手際から明らかにできなかったことの方が多いようである。

検出時の平面観察では、ゴミ焼きをした大きな搅乱穴が2ヶ所で見られたうえに、耕作による畝の搅乱も著しく不明瞭な点は多かったが、数軒におよぶ重複にみてとれた。しかし、重複する住居址の数、その新旧関係が把握できるような状態ではなかった。自然傾斜の南北方向に土層観察ベルトを設定し調査を進めた。

埋土は一様に硬いうえに色調の変化に乏しく、やはり重複する住居址の数、新旧関係を明らかにすることはできないままであった。埋土が硬かったことが災いし、床面を認定することができないまま掘り下げた竪穴をA号住居址、また、全掘の間際に2号住居址よりも旧く、4号住居址とは新旧関係が不明な竪穴が明らかになり、これをB号住居址と呼ぶことにした。したがって、この狭い範囲で5軒の住居址が自然傾斜の南北方向で僅かにずれながら重複していたことになった。調査では重複と考えたが、該期の竪穴住居址は同心円状建て直しや、若干のずれを有する数多い重複が見られることから考えると、本址も拡張を伴う建て直しと考えた方がよいのかもしれないが、ここでは重複する住居址と考えておきたい。

遺物の取り上げは、重複関係が明らかにできないまま進めた調査であり、住居址別に取り上げたつもりではあるが、調査の進行過程で明らかになった住居址もあり明確に分けることはできなかった。

第 A 号竪穴住居址

2号住居址と4号住居址の上層に構築されていた住居址で、新旧関係は本址が一番新しい。住居址の認定が遅くなりその多くは図示することができなかった。

土層観察ベルトではほぼ水平の床面が認められるが、壁の立ち上がりは明らかにすることができなかった。床面直上の広範囲に焼土が散乱し、この範囲を住居範囲と考えている。炉址は、住居ほぼ中央と思われる位置に地床炉がある。火床の焼土は厚くしっかりとしている。

遺物は住居址の認定が遅れたこともあり、本址に確実に伴う遺物を明らかにすることはできなかった。

第 2 号竪穴住居址

3号住居址・4号住居址と重複している。3号住居址と重複した付近には大きなゴミ穴が掘られていたため、不明瞭な点は多かったが本址を一番新しい住居址と認定し精査を進めた。その過程で3号住居址を切り、4号住居址とB号住居址にロームの貼り床をしていることが認められた。したがって新旧関係は、本址が新しく3号住居址・4号住居址・B号住居址が古い。

ローム層中に構築された住居址で、規模は長軸(552)cm、短軸(513)cmで、壁の立ち上がりはほぼ垂直で良好である。床面はほぼ水平の硬い良好なタタキ床であるが、前記したように4号住居址とB号住居址にはロームの貼り床をしている。ピットの検出は多く主柱穴を特定することができない。炉址は住居中央に地炉址があるが、焼土の範囲は狭い。

遺物は少ないが、縄文時代前期最末の土器と石器がある。

土器は破片ばかりであるが、うち2点を図示した(第7図1・2)。

石器は図示していないが、凹石6点、磨石1点、黒曜石剥片などがある。

第 3 号竪穴住居址

2号住居址と重複するが新旧関係は、本址が旧く2号住居址が新しい。床面は僅かな範囲が三日月状に残存していただけである。その範囲から規模と形状を推測すると、径(560)cm前後の円形ないしは楕円形と思われる。

ローム層中に構築された住居址で、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ水平のタタキ床で硬く良好である。

壁直下で外径20cm、内径11cmの小さな円形石組を検出したが、その状態は円形石圓炉そのものであるが、内部はもとより付近から焼土を検出することは一切できなかった。また、その位置関係からも炉とは違う性格を有するものと思われる。柱穴と特定できるピットは

検出できなかったが、貯蔵穴と思われる大きなピットや性格不明の小さなピットはある。炉址は欠損部に構築されていたようで確認できなかった。

遺物は少ないが、縄文時代前期最末の土器と石器がある。

土器は図示していないが、破片ばかりである。

石器は図示していないが、横刃形石器1点、黒曜石の剥片などがある。

第4号竪穴住居址

2号住居址とB号住居址と重複するが新旧関係は、2号住居址が本址にロームの貼り床をしていたことから本址が旧く、2号住居址が新しい。B号住居址との新旧関係を明らかにすることはできなかった。残存範囲から規模と形状を推測すると、径(460)cm前後の円形ないしは梢円形と思われる。

ローム層中に構築された住居址で、壁は低いがほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ水平のタタキ床で硬く良好であるが、この辺りは傾斜が強くすでに南半分ほどは流失していた。柱穴状のピットは検出したが主柱穴を特定することはできない。炉址は中央やや北寄りに地床炉がある。

遺物は少ないが、縄文時代前期最末の土器と石器がある。

土器は図示していないが、破片ばかりである。

石器は図示していないが、黒曜石の剥片がある。

第B号竪穴住居址

2号住居址と4号住居址と重複するが新旧関係は、2号住居址が本址にロームの貼り床をしていたことから本址が旧く、2号住居址が新しい。4号住居址との新旧関係を明らかにすることはできなかった。残存範囲から規模と形状を推測すると、径(340)cm前後の隅丸方形ないしは梢円形と思われる。

ローム層中に構築された住居址で、壁は低いがほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ水平のタタキ床で硬く良好である。柱穴状のピットは検出しているが主柱穴を特定することはできない。炉址はほぼ中央に地床炉がある。

遺物は住居址の認定が遅れ、確実に本址に伴うものは明らかにできなかった。

第5号・第7号竪穴住居址(第6図、写真6)

第5号竪穴住居址

南斜面のCV-40、CW-40の2グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である。黒色土中に構築されていたが、この辺りは傾斜が強い上に、南側はすでに水田造成工事に

より欠損するなど悪条件が重なり不明瞭な点の方が多い。

7号住居址と重複するが新旧関係は、7号住居址を切っていることから本址が新しく、7号住居址が旧い。

自然傾斜の南北方向における土層観察で、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。

豊穴の大きさは225×(130)cmで、壁は低いが立ち上がりは普通で、床面はやや南に傾斜している。柱穴とカマドは検出するまでに至っていない。

遺物は少ないが、平安時代後期の土師器と灰釉陶器の破片がある。

第7号豊穴住居址

CV-39・40、CW-39・40の4グリッド跨る円形を呈する豊穴住居址である。5号住居址と重複するが、新旧関係は5号住居址に切られていたことから本址が旧く、5号住居址が新しい。なお、南側はすでに水田の造成工事で欠損していた。

自然傾斜の南北方向の土層観察で、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。

豊穴の大きさは径(290)cm程である。壁は低いが立ち上がりは普通で、東壁上から配石状の石組を検出しているが、黒色土中に構築された豊穴であり壁を補強するための石組のように見受けられた。床面は黒色土に構築されており不明瞭な点は多いが南に傾斜している。東壁から北壁の直下では周溝を確認した。柱穴は検出するまでに至っていない。炉址は住居ほぼ中央にあるが、そこは水田造成すでに破壊された法面にあたり、焼土が確認できただけである。

遺物は少ないが、縄文時代前期最末と中期中葉の土器と石器、平安時代後期の土師器がある。住居址のあり方は前期最末と思われるもので、縄文時代中期と平安時代後期の遺物は、後の耕作などで混入したものであろう。

土器は図示していないが、小さな破片ばかりである。

石器は図示していないが、黒曜石の剥片がある。

第6号豊穴住居址(第6図、写真7)

南斜面のBC-40、BD-40~42、BE-40・41の6グリッドに跨る円形を呈する豊穴住居址である。この辺りは傾斜が極めて強く南側の半分以上はすでに流失していた。小豊穴8と重複するが、新旧関係はすでに埋土が流失しており明らかにすることはできなかった。

自然傾斜の南北方向における土層観察では、北壁際は28cmを計る厚い埋土も傾斜が強いため住居中程では無くなり、また、耕作による畠の搅乱などもみられ不明瞭な点は多いが、

いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没である。

黒色土からローム層中に構築された住居址である。傾斜が極めて強くローム層中に構築された僅かな範囲が遺存しただけであり詳しいことは一切わからない。壁・床ともに南側の半分ほどはすでに流失していたが、竪穴の大きさは径(400)cm程である。北壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存する床面はほぼ水平のタタキ床で硬く良好である。柱穴状のピットは検出したが規格性に乏しく主柱穴を特定することはできない。炉址は流失範囲に構築されていたものと思われ確認できなかった。

遺物は少ないが、縄文時代前期最末と中期中葉の土器と石器、平安時代後期の土師器がある。住居址のあり方は前期最末と思われるもので、縄文時代中期と平安時代後期の遺物は、後の耕作などで混入したものであろう。

土器は図示していないが、小さな破片ばかりである。

石器は図示していないが、凹石1点、磨石1点、黒曜石の剥片などがある。

第8号・第9号竪穴住居址（第6図、写真8）

第8号竪穴住居址

南斜面のCP-41~43、CQ-39~43、CR-39~43、CS-41~42の15グリッドに跨る円形を呈する竪穴住居址である。この辺りは傾斜が極めて強いこともあり、南側の半分以上はすでに流失していた。9号住居址および小竪穴11と重複するが、新旧関係は小竪穴11に切られていることから本址が旧く、小竪穴11が新しい。また、9号住居址を切っていることから本址が新しく、9号住居址が古い。

自然傾斜の南北方向における土層観察では、北壁際は47cmを計る厚い埋土も傾斜が強いため住居中程では無くなり、また、耕作による歓の擾乱などもみられ不明瞭な点が多いが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められた自然埋没である。

黒色土からローム層中に構築された住居址で、ローム層中に構築された範囲が遺存しただけであり詳しいことは一切わからない。壁・床ともに南側の半分程はすでに流失していたが、竪穴の大きさは径608cm程である。北壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は北側がほぼ水平のロームのタタキ床で硬いが、中程は黒色土の床面になりやや軟弱となる。柱穴はロームを床面としている範囲では検出できたが、黒色土部分では検出するまでに至らなかった。炉址は住居ほぼ中央に地床炉があり焼土の範囲は広い。

遺物は少ないが、縄文時代中期初頭の土器と石器がある。

土器は図示していないが、破片ばかりである。

石器は図示していないが、石錘2点、凹石5点、黒曜石の剥片などがある。石錘が当地方で出土することは極めて少なく、生産活動を考える上で注目されるものである。

第9号竪穴住居址

南斜面のCQ-43、CR-42・43、CS-42・43の5グリッドに跨る竪穴住居址である。8号住居址および小竪穴11と重複するが、新旧関係は8号住居址と小竪穴11に切られていたことから本址が一番旧く、8号住居址と小竪穴11が新しい。

残存部分が少なく埋土の観察は不十分であるが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土が認められたことから自然埋没であろう。

ローム層中に構築された住居址であるが、重複で南側の半分以上はすでに欠損し、僅かな範囲が残存しただけで、円形ないしは楕円形と思われるが竪穴の規模を推定することは困難である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面もほぼ水平で良いが、残存部は少なく柱穴および炉址を検出することはできなかった。

遺物の発見はない。

第10号竪穴住居址（第6・7・9図、写真9・23）

尾根上のCF-46~48、CG-46~48、CH-46~48の9グリッドに跨る円形を呈する竪穴住居址であるが、掘り込みは浅く西南側半分程はすでに流失していた。

自然傾斜の東西方向における土層観察では、埋土は薄く不明瞭な点が多いが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。

ローム層中に構築された住居址で、大きさは長軸(375)cmを計り、壁の立ち上がりは普通であるが南西側はすでに流失している。床面は部分的にタクキ床も認められたが南にやや傾斜し、総体的には軟弱で良くない。柱穴状のピットは検出しているが規格性に乏しく主柱穴を特定することはできない。炉址は住居中央や北寄りに方形石囲炉が構築されていたが、炉石に石皿の破損品3点が使用されていた（写真23）。

遺物は少ないが、縄文時代中期中葉の土器と石器がある。

土器は無文の深鉢1点（第7図3）と僅かな破片がある。

石器は横刃形石器1点（第9図1）、石皿2点がある。（1）はP1から出土した。石皿は炉石として使用されていた3点の破損品で、2点が接合し1点には線刻が施されている。

第11号・第12号竪穴住居址（第6図、写真10・24）

第11号竪穴住居址

南斜面のCF-38~40、CG-38~40、CH-38~40、CI-40の10グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である。12号住居址および小竪穴104と重複するが、新旧関係は小竪穴104に切られていることから本址が旧く、小竪穴104が新しい。また、12号住居址を切っていることから本址が新しく、12号住居址が旧い。

自然傾斜の南北方向における土層観察では、北壁際では50cmを計る厚い埋土も傾斜が強いため南側では無くなるが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。

黒色土からローム層中に構築された住居址で、大きさは長軸(530)cm、短軸495cmを計り、壁はほぼ垂直にたちあがり良好である。周溝は北壁から西壁直下にみられるが、西壁では一部二重にめぐっている。床面は地山のローム範囲は硬く良好であるが、黒色土層上にロームの貼床をした範囲はやや軟弱である。なお、貼床部分は沈み傾向がみられ南にやや傾斜している。主柱穴は検出できなかったが東壁と西壁には間仕切りと考えられる柱穴がある。カマドは北東隅に石組粘土カマドがあり遺存状態は良い(写真24)。カマドの両脇には灰だめと思われるピットがあり、東壁側のピットは壁よりも外に張り出している。中央北よりの大きなピットは性格は不明である。

遺物は少ないが、平安時代後期の土師器と灰釉陶器の破片がある。

第12号竪穴住居址

CF-40、CG-40の2グリッドに跨る竪穴住居址である。11号住居址および小竪穴104と重複するが、新旧関係は小竪穴104と11号住居址に切られていることから本址が一番旧く、小竪穴104と11号住居址が新しい。

ローム層中に構築された住居址であるが、重複でその多くはすでに欠損しており詳しいことは一切不明である。

遺物は無いに等しく、縄文時代の土器破片1点と黒曜石の剥片2点だけであり、帰属時期を積極的に示す資料はない。重複関係から平安時代の11号住居址より古いことは判明しているが、ここでは、現場作業の折りに想定した平安時代と考えたが根拠はない。

第13号・第14号・第15号竪穴住居址(第6・7・9・13図、写真11・12・25・26)

第13号・第14号竪穴住居址

尾根上から肩部にあたるBW-45・46、BX-45~47、BY-45~47、CA-45~47、CB-45・46の13グリッドに跨る竪穴住居址で、2軒の住居址が同心円上で重複しているものと思われるが詳細については不明である。プランは円形ないしは楕円形であろう。北側で15号住居址と重複するが、新旧関係は15号住居址が本址にロームの貼り床をしていることから13号・14号住居址が旧く、15号住居址が新しい。

検出時点で2軒の住居址が東西方向で重複していることは考えられたが、その観察で明らかにすることことができなかつたため、東西方向で土層観察を繰り返し行うが埋土は薄く明確にできないままである。

黒色土からローム層中に構築された住居址で、大きさは径632cm程を計り、壁は低いがほぼ垂直に立ち上がり普通であるが南側はすでに流失していた。床面は南にやや傾斜しているがタタキ床でしっかりしている。柱穴の中には重複するものがある。炉址は住居ほぼ中央に地床炉が2箇所と埋甕炉がある（写真25）。なお、1箇所の地床炉にはあたかも土器を抜き取ったような穴が焼土の真中にみられた。

遺物は少ないが、縄文時代中期初頭の土器と石器がある。

土器は深鉢（第7図4・5）と僅かな破片で、（4）は炉に埋設されていた炉体土器で下胴部を欠損する。

石器は磨製石斧1点（第9図5）、打製石斧1点（第9図2）、凹石2点、黒曜石の剥片などがある。（5）は破損後に敲石として使用されている。

第15号竪穴住居址

尾根上のCA-46~48、CB-46~48、CC-46~48の9グリッドに跨る円形を呈する竪穴住居址である。南側では13号・14号住居址と重複するが、新旧関係は本址が13号・14号住居址にロームの貼り床をしていたことから新しく、13号・14号住居址が古い。

自然傾斜の南北方向における土層観察で、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。

ローム層中に構築された竪穴住居址で、大きさは長軸476cm、短軸444cmを計り、壁は低いがほぼ垂直に立ち上がり普通である。床面は部分的にタタキ床も認められたがやや南に傾斜していてあまり良くない。柱穴は7本あり、炉址は住居ほぼ中央やや北寄りに方形石囲炉がある（写真26）。

遺物は少ないが、縄文時代中期中葉の土器と石器がある。

土器は図示していないが、破片ばかりである。

石器は打製石斧3点（第9図3・4・6）、石皿1点、黒曜石の剥片などがある。（3・4）は横刃形石器の可能性が高く（6）はP1から出土した。石皿は完形品で床面に伏せられていた。

第16号竪穴住居址（第6・7・9図、写真13・27）

南斜面のBS-43~45、BT-43~45、BU-43~45の9グリッドに跨る東西に長い楕円形を呈する竪穴住居址である。小竪穴32と重複するが、新旧関係はすでに床面が流失しており土層の観察ができない状態で不明である。

自然傾斜の南北方向における土層観察で、北壁際では23cmを計る厚い埋土も傾斜が強いため南側では無くなるが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没で

ある。

ローム層中に構築された住居址で、大きさは長軸423cm、短軸(330)cmを計り、壁はほぼ垂直に立ち上がり普通であるが南側の半分ほどはすでに流失していた。床面はほぼ水平で部分的にはタタキ床も認められたが総体的にはあまり良くない。柱穴は4本検出した。炉址の南側で検出したピットの性格は不明である。炉址は、住居ほぼ中央にコの字状石圓炉があり中心に土器が埋設されていた。土器埋設方形石圓炉の東辺の石が抜き取られたものであろう(写真27)。

遺物は少ないが、縄文時代中期中葉の土器と石器がある。

土器は深鉢(第7図6)と僅かな破片で、(6)は炉内に埋設されていた。

石器は打製石斧3点(第9図7・8・11)、石匙2点(第9図9・10)、凹石1点、磨石1点・叩石1点、軽石製品1点、黒曜石の剥片などがある。打製石斧とした3点は横刃形石器の可能性が高いものばかりであり、(11)は炉内からの出土である。石匙と考えた(10)は打製石斧かもしれない。

第17号竪穴住居址(第6図)

南斜面のCA-37・38、CB-37・38の4グリッドに跨る円形を呈する竪穴住居址である。斜面に構築された住居址で南側の半分程はすでに流失していた。

自然傾斜の南北方向における土層観察で、北壁際で22cmを計る埋土も傾斜が強いため南側では無くなってしまい詳しいことはわからないが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。

ローム層中に構築された住居址で、大きさは長軸265cmを計り、壁の立ち上がりは普通であるが、北側の約半分程が残存しただけで南側はすでに流失していた。床面は部分的にはタタキ床も認められたが、南にやや傾斜していたうえに総体的には軟弱で良くない。柱穴と炉址を検出することが出来なかったことから住居址と考えるには問題点を残しているが、ここでは住居址と考えておきたい。

遺物は少ないが、縄文時代中期初頭の土器と石器がある。

土器は図示していないが、小破片ばかりである。

石器は図示していないが、黒曜石である。

第18号竪穴住居址(第6図、写真14)

南斜面のCA-35、CB-35・36、CC-36の4グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である。すでに南側は水田造成による削平で大きく欠損し、残存した範囲の方が少ない。小竪穴27と重複するが、新旧関係は小竪穴27を切っていることから本址が新しく、小

豊穴27が旧い。

自然傾斜の南北方向で土層観察をおこなったが、すでに水田造成により欠損した範囲が多く詳しいことはわからないが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められたことから自然埋没であろう。

ローム層中に構築された住居址で、水田造成で南側を大きく欠損するが大きさは長軸265cm、短軸(91)cmを計る。壁はほぼ垂直にたちあがり良好で直下に周溝がみられた。床面は硬いタタキ床で良好である。柱穴は検出できなかった。カマドは北壁西寄りに石組粘土カマドが構築されているが遺存状態は良くない。カマドの両脇には灰だめと思われるピットがある。

遺物は少ないが、平安時代後期の土師器と灰釉陶器の破片がある。

第19号豊穴住居址（第6・9図、写真15）

南斜面のBP-37~39、BQ-37~40、BR-37~40、BS-37~40の15グリッドに跨る円形を呈する豊穴住居址である。検出時においては見落とし確認できなかったが近世の墓壙と重複していた。

自然傾斜の南北方向で土層観察を行ったが、庭木（一位）の苗木が植えられたことによる掘りかえしが著しかった上に、この辺りは傾斜が強く、すでに豊穴住居址の南側は流失しており不明瞭な点は多かったが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。

ローム層中に構築された住居址で、大きさは径632cmを計り、壁はグラグラと立ち上がり不安定である。埋土中には数多いロームブロックがみられ、壁土が落下したことが容易に考えられる状態である。南側の壁はすでに流失している。床面はほぼ水平のタタキ床でしっかりしたもので良好である。柱穴と思われるピットを検出しているがその規模はやや小さいようである。壁際には柱穴状の小さいピットがある。炉址は住居ほぼ中央に地床炉があり、焼土の真中にはあたかも土器を抜き取ったような穴がみられる。

遺物は少ないが、縄文時代中期初頭の土器・石器・土製品がある。

土器は図示していないが、小破片ばかりである。

石器は打製石斧1点（第9図12）、凹石1点、黒曜石の剥片などがある。

土製品は図示していないが、土偶の破損品と思われる小破片がある。残存する部分が少なく積極的にいえるものではないが、ここでは土偶の小破片と考えておきたい。

第20号豊穴住居址（第6・9・10図、写真16）

南西斜面のBM-39~41、BN-39~41、BO-39・40の8グリッドに跨る円形を呈する

豎穴住居址である。

自然傾斜の南北方向で土層観察を行ったが、庭木（一位）の苗木が植えられたことによる掘りかえしが著しかった上に、この辺りは傾斜が強く、すでに豎穴住居址の南側は流失しており不明瞭な点は多かったが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められる自然埋没である。

ローム層中に構築された住居址で、壁・床ともに南西側の半分ほどは流失していたが、大きさは径450cm程で、壁はダラダラと立ち上がり不安定である。床面は硬いタタキ床で良いが、周溝より外側は一段高くなる中期中葉新道期に特有の構造を持つものである。主柱穴は4本であるが、重複するものがあり、周溝は二重にめぐる箇所もみられ同心円上建て直しが考えられる。炉址は住居ほぼ中央に地床炉があるが、焼土の真中には土器を抜き取ったと思われるような穴があり、埋壺炉であった可能性を捨てることができない。

遺物は少ないが、縄文時代中期中葉の土器と石器がある。

土器は図示していないが、破片ばかりであるが有孔鈎付土器もある。

石器は打製石斧8点（第9図13～18・第10図20）、横刃形石器1点（19）、凹石2点、磨石1点、黒曜石の剥片などがある。（15・16）は横刃形石器の可能性が高い。

第21号・第22号豎穴住居址（第6～8図、写真17・18・28・29）

尾根上のBJ-50～53、BK-50～53、BL-51～53の11グリッドに跨る豎穴住居址である。検出時点においては2軒の豎穴住居址が南北方向で重複しているように思われ、21号・22号豎穴住居址としたが、平面観察では明らかにできなかったことが多く、南北方向で土層観察の繰り返し行ったがやはり不明瞭な点が多く明確にできないままであった。平面プランは南北に長い楕円形を呈し、周溝および炉址の検出状況からみると同心円状の建て直しが行われているようである。埋土はいわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。

ローム層中に構築された住居址で、大きさは長軸632cm、短軸457cmを計り、壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ水平のタタキ床で良い。周溝は直線的に掘られているが、東壁際は二重にめぐる。柱穴状のビットは多く主柱穴を特定することはできない。炉址は住居ほぼ中央に地床炉と埋壺炉がある（写真28・29）。地床炉の真中には土器を抜き取ったと思われるような穴があり、埋壺炉であった可能性をすることができる。なお、写真28が第21号住居址、写真29が第22号住居址の埋壺炉である。

遺物は少ないが、縄文時代中期初頭の土器・石器・土製品がある。

土器は深鉢（第7図7）と破片がある。炉に埋設されていた炉体土器は火熱のため脆くなってしまっており、復原することが不可能なため図示できなかった。

石器は図示していないが石皿1点、凹石5点、黒曜石の剥片などがある。

土製品は土器破片利用の土製円盤1点（第8図13）がある。

第25号竪穴住居址（第6図）

南斜面のCD-38・39、CE-38・39の4グリッドに跨る北壁に直線部分をもつ楕円形を呈する竪穴住居址である。斜面に構築された竪穴住居址すでに南側は流失していた。

自然傾斜の東西方向で土層観察を行ったが、北壁際で18cmを計る埋土は、傾斜が強いため南側はすでに流失しており詳しいことは不明であるが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。

ローム層中に構築された竪穴住居址で、大きさは長軸250cm計り、壁の立ち上がりは普通であるが南壁は流失していた。床面は部分的にタタキ床がみられたが、南にやや傾斜しており総体的には軟弱で良くない。柱穴と炉址を検出するまでに至らず住居址と考えるうえで問題点も多いが、ここでは住居址と考えておきたい。

遺物の発見はない。

第26号竪穴住居址（第6図、写真19）

尾根上のBE-53~55、BF-53~55の6グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址である。掘り込みが浅いためすでに西側の半分程はすでに流失していた。小竪穴65・66と重複するが、新旧関係は小竪穴65・66が住居址を切っていることから本址が旧く、小竪穴65・66が新しい。

自然傾斜の東西方向で土層観察を行ったが、埋土は薄く不明瞭な点が多く詳しいことはわからないが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。

ローム層中に構築された竪穴住居址で、壁・床とともに南西側の半分程は流失していた。大きさは長軸405cm、短軸(300)cmを計り、壁は低いがほぼ垂直に立ち上がり普通である。床面はタタキ床も部分的にみられたが、やや西に傾斜し総体的には軟弱で良くない。ピットを検出したが柱穴よりも大きなもので、柱穴と特定できるものではない。炉址はすでに流失した箇所に構築されていたものと思われ検出するまでに至らなかった。したがって、本址を住居址と考えるうえで問題点はあるが、ここでは住居址と考えておきたい。

遺物は少ないが、縄文時代中期初頭の土器と石器がある。

土器は無文の小破片ばかりである。図示していないが東海地方からの搬入土器がある。

石器は図示していないが、凹石3点、黒曜石の剥片などがある。

第27号竪穴住居址（第6図、写真20）

調査区西側の南斜面にあたるBB-49~51、BC-49~51、BD-49~51の9グリッドに跨る竪穴住居址である。

この辺りは傾斜が強くすでに流失した範囲が広いうえに、埋土は薄く詳しいことはわからないが、自然埋没と考えられるものである。

ローム層中に構築された竪穴住居址であるが、すでに壁と床面の多くは流失しており、僅かに遺存した東壁からプランを推測すると円形と思われるが、その大きさまではわからない。壁の状態は悪く、床面は部分的にタタキ床もみられたが総体的には軟弱である。主柱穴は4本で重複するものもある。地床炉が住居ほぼ中央にありすでに半分程は流失していた。

遺物は少ないが、縄文時代中期初頭の土器と石器がある。

土器は図示していないが、小さな破片ばかりである。

石器は図示していないが、打製石斧の破損品1点と黒曜石の剥片がある。

第28号・第29号・第30号竪穴住居址（第6・7図、写真21・30・31）

第28号竪穴住居址

南斜面のBH-47・48、BI-47・48、BJ-48の5グリッドに跨る基本的には楕円形を呈する竪穴住居址である。

検出時における平面観察では埋土は搅乱しており、土層の観察でも同様であったが、搅乱穴ではなく竪穴住居址が埋没していることは確かであり、すでに掘られていることが考えられた。

地権者の小平実さんに話を聞くと「いつ頃か覚えてはいないが、原学校で発掘した。」との事である。しかし、村教育委員会に記録は残されていない。29号住居址と重複するが、すでに掘られた住居址であり新旧関係を明らかすることはできなかった。破壊された範囲が広く明確ではないが、29号竪穴住居址の掘り込みの方が28号竪穴住居址より深いため、わずかに遺存した29号竪穴住居址の埋土中で、28号竪穴住居址の床面の有無を注意し精査を進めたが検出することはできなかった。この事実は、本址が29号住居址に切られていることになり、本址が旧いことになるが、重複範囲が狭いこともあり積極的にいえることはない。

搅乱した埋土中に多量のロームが包含されていた。観察では壁と床面はすでに以前の発掘で掘られていることが見受けられ、その破壊は著しく住居址の姿を留めているとは思えない状態であった。炉址は床面までが掘られた状態で確認することはできなかった。このような状態で住居址に確定するには問題点も多いが、ここでは過去に発掘が行われた住居

址と考えておきたい。

遺物は極めて少ないと、埋土中から僅かな土器破片と黒曜石の剥片が出土したが、本址の帰属時期を示す資料ではない。したがって、明確な帰属時期を示すことができない。

第29号竪穴住居址

BE-47・48、BF-46~49、BG-46~49、BH-46~48の13グリッドに跨る円形を呈する竪穴住居址である。28号・30号住居址と重複するが、新旧関係は本址が30号住居址を切っていることから、本址が新しく30号住居址が古い。28号住居址との重複は前記した通り、本址が新しく28号住居址が古いと考えている。

自然傾斜の南北方向で土層観察を行ったが、庭木（一位）の苗木が植えられていたことにより掘りかえされていたうえに、この辺りは傾斜が強く、すでに住居址の南側は床面までが流失していたため詳しいことはわからないが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められる自然埋没である。

ローム層中に構築された竪穴住居址であるが、すでに流失した範囲が広いが遺存した壁・床面から推測すると径580cm程である。壁の立ち上がりはなんだらかで良くない。床面は硬いタタキ床で良好であるが遺存した範囲は僅かである。周溝は直線的に掘られている。主柱穴は5本と思われるが重複するものもあり、壁柱穴もみられる。炉址は住居中央に埋甕炉がある（写真30）。重複した柱穴と周溝のあり方から同心円上建て直しが考えられる。遺物は少ないと、縄文時代中期初頭の土器と石器がある。

土器は深鉢（第7図8）と破片がある。（8）は炉に埋設されていた炉体土器で、口縁帶と下脇部を欠損する。西日本から搬入されたものである。

石器は石礫5点、石匙1点、凹石3点、黒曜石の剥片などがある。

第30号竪穴住居址

BD-47~49、BE-47~49の6グリッドに跨る円形を呈する竪穴住居址である。29号住居址と重複するが、新旧関係は29号住居址に切られていることから本址が古く、29号住居址が新しい。

自然傾斜の南北方向で土層観察を行ったが、庭木（一位）の苗木が植えられていたことにより掘りかえされていたうえに、この辺りは傾斜が強く、すでに住居址の南側は床面までが流失していたため詳しいことはわからないが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められる自然埋没である。

ローム層中に構築された竪穴住居址であるが、29号住居址との重複で欠損範囲が広いうえに、すでに流失した範囲も広く竪穴の大きさは不明である。壁は低く立ち上がりはなんだらかで良いが、床面は硬いタタキ床で良好である。

らかで良くない。床面は硬いタタキ床で良好である。周溝は柱穴間を結んでいるが竪穴のプランとはやや違っている。炉址は3個所の地床炉と埋甕炉がある（写真31）。流失した範囲が広くはっきりしたことはいえないが、周溝の位置と複数の炉址から数回におよぶ同心円状建て直しが考えられるものである。

遺物は少ないが、縄文時代中期初頭の土器と石器である。

土器は炉に埋設されていた深鉢と小さな破片がある。炉体土器は、流失した部分に炉が構築されていたため、土器の遺存は少なく復原できなかった。

石器は、黒曜石の剥片などがある。

第31号・第32号・第33号住居址（第6図、写真22）

第31号・第32号・第33号住居址

南斜面のBD-40~42、BE-40~43、BF-39~42、BF-39~42の15グリッドに跨るが、円形ないしは椭円形の竪穴住居址が重複している。検出時点で2軒の住居址が東西方向で重複していることは確認できたが、新旧関係を明らかにすることはできなかった。また、北壁でも小竪穴180と重複するが、やはり観察不足で新旧関係は明らかにできなかつた。また、本址の記録・実測図を紛失してしまい反省している。

以上のようにミスが重なり詳細については一切不明であるが、大まかなことを記載しておきたい。埋土は自然傾斜の南北方向で観察したが、いわゆる逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没である。

黒色土からローム層中に構築された住居址であるが、傾斜がつよいこともあり南側はすでに流失していた上に水田造成により欠損している。

壁の立ち上がりは普通であるが床面は南にやや傾斜している。ピットは数基検出したが、貯藏穴と柱穴である。炉址は地床炉を3箇所で検出したが、3軒の重複でありそれぞれの住居址に1箇所の地床炉が構築されていたものと思われる。

遺物は少ないが、縄文時代中期中葉の土器と石器がある。

土器は図示していないが破片ばかりである。

石器は図示していないが打製石斧1点、磨石1点、黒曜石の剥片などがある。

2 建 物 址

建物跡1

D地区の尾根上で検出した。1号住居址と重複するが、新旧関係は農道による擾乱が著しく土層観察ができない状態で不明である。

柱穴は並ぶが掘り込みが検出できないことから建物址と考えた。長径28~30cmの円形の柱穴4本で、深さは前記したように農道の攪乱ですでにロームは削られ一様ではないが、50cm前後の深さを有していたものと思われる。

柱穴から平安時代の土師器の破片が出土したことから平安時代に帰属するものと思われる。

3 小 竪 穴

小竪穴は179基検出したが、検出した平面プランの自然傾斜方向ないしは長軸方向で2分割し、その片一方の精査・土層観察等を行い残り半分の精査を実施し、実測・記録等を行なうが帰属時期を明確に示す遺物が伴出したものは少ない。

柱穴状のものが多く小竪穴61で柱根痕を確認したこともあり、現場で建物址を想定し検討したが、方形ないしは円形に並ぶ規格性を持つものは確認することができなかったため、単独の小竪穴と考えた。

ここでは柱根痕を確認した小竪穴61、土器を伴出した小竪穴108・小竪穴120については若干の説明を加えてみたい。

小竪穴61（第6図、写真32）

BH-50、BI-50の2グリッドに跨る小竪穴である。ローム層中に構築されていたが、平面は楕円形を呈し大きさは長軸103cm、短軸56cm、深さ68cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直になる面とやや斜めになる面がある。底面は平であるがやや傾いている。

2分割した土層観察で柱根状の痕跡を確認するが明確なものではなく、残る半分の精査は数cm掘り下げては平面観察を繰り返し行った。その結果土層断面で確認した柱根痕とは違う新しい柱根痕を検出した。

小竪穴108（第6・8図、写真33）

BY-40、CA-40の2グリッドに跨る小竪穴である。ローム層中に構築されていたが、平面は円形を呈し大きさは長軸131cm、短軸120cm、深さ68cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直で底面は平のしっかりしたものである。

底面上10cm位に角柱状の礫が横倒状に遺存し、その上部から口縁部帯と下脛部を欠損する深鉢が横位で出土した。角柱状の礫は手を加えた痕跡が認められない自然石であるが、立石の可能性が高いものである。礫・土器とも底面に密着していたものではない。

遺物は少ないが、縄文時代中期初頭の土器がある。

土器は深鉢（第8図12）である。

石器はない。

小豎穴120（第6・8図、写真34・35）

BJ-59、BJ-60の2グリッドに跨る小豎穴である。小豎穴121と重複するが新旧関係は確実にできなかったが、本址が新しいと思っている。ローム層中に構築されていたが、平面は橢円形を呈し大きさは長軸153cm、短軸(126)cm、深さ47.5cmである。壁の立ち上がりはなだらかで底面は丸みを持ち舟底状となる。

深鉢（第8図10）と浅鉢（11）は、なだらかに立ち上がる小豎穴の壁面に正位の状態で並んでいたが、両者とも土器の底面は小豎穴の壁面に密着していた。したがって、確実にこの位置に据置かれたものであり小豎穴の性格を考えるうえで注目されるものになろう。

小豎穴の規模と形状、土器の出土位置およびそのあり方は、原村大石遺跡の土壙848に類似している。違う点は大石遺跡のミニチュア土器2点が、本遺跡では小振りの深鉢の下臍部1点である。深鉢の遺存部分には破損はなく、ミニチュア土器と同様に扱われた可能性が高いようである。

土器は、縄文時代中期初頭である。

4 墓 壇

墓壇は2基を検出したが、墓壇1は近世で、墓壇2が平安時代である。ここでは平安時代の墓壇2について記載しておきたい。

墓壇2（第6図、写真36）

尾根上のBV-48~50の3グリッドに跨って検出した。大きさは長軸214cm、短軸122cmの隅丸長方形で深さ46cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がりはよい。平安時代後期の土師器壺5点と乾漆が出土したが、乾漆は小残片であり製品を復原することはできない。

5 遺構外出土遺物

縄文時代（第8・10~11図）

土器は破片ばかりで図示しなかった。

石器は打製石斧23点（第10図31~34・第11図39~57）、横刃形石器1点（第10図35）、石匙2点（第10図36・38）、叩石1点（第10図37）を図示した。打製石斧とした（44・45・

51・52)は横刃形石器かもしれない。石匙(38)は積極的にいえるものではない。

土製品は、土器破片使用の土製円盤5点(第8図14~18)である。

平安時代

土師器、須恵器、灰釉陶器の破片が僅かにあるが図示しなかった。

VII まとめ

縄文時代

調査の結果、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることがわかった。しかし、整理期間の都合で遺構・遺物とともに、未だ分析に手をつけることができないでいる。発掘調査の折々に感じたことを述べまとめとしたい。

当地方の縄文時代中期の遺跡としては、出土した土器・石器ともに少ない上に、未だ分析に手がまらない状態であり詳しいことを述べることができないが、土器は、前期最末の籠畠期から中期中葉の井戸尻期である。中心になる時期は中期初頭の九兵衛尾根I・II期で、八ヶ岳西南麓地方においては遺跡数が少ない時期である。

村内には、昭和50年に中央自動車道建設に先立ち緊急発掘調査された大石遺跡、平成6年に県営圃場整備事業原村西部地区に先立ち緊急発掘調査された宿尻遺跡などがある。大石遺跡は直線距離で1200m、宿尻遺跡は1000mと比較的近いところにあり、これらの遺跡が無関係で存在していたとは思えない。しかし、前記したように分析に未だ手をつけていないこともあり、詳しいことを述べることができない。

遺跡の東側約半分位の調査であったが、尾根巾が狭く住居址は比較的傾斜がきつい南斜面に構築されていた。小豎穴は尾根の肩部にあたる比較的緩やかな斜面に展開する傾向がみられた。遺物が伴出した小豎穴は少ないと、出土状態から墓壙と思われるものもある。

本集落跡は、やせ尾根に立地していたこともあり、大石遺跡でみられたような環状集落跡とは異なる点が多いといえよう。付近に巾の広い尾根は数多く点在しているにも係わらず、このやせ尾根を居住地として選定したことは、この中尾根に何かを求めていたことの表れであるが、その何かはわからない。

中期初頭期についてみると、大石遺跡、宿尻遺跡そして本遺跡が極めて狭い範囲内に立地している事実、大石遺跡は痩せ尾根の緩やかな北斜面、宿尻遺跡は低い尾根上の平坦部、本遺跡は痩せ尾根の比較的傾斜のきつい南斜面を居住地とし、3遺跡とも異なる立地であり解明すべき研究課題は多いようである。

平安時代

平安時代の住居址は5軒検出したが、11号と12号豎穴住居址は重複しており、少なくて

も2時期にわたる集落が営まれていたようである。

南斜面のいわゆる日溜り地形の等高線に沿って展開する典型的な集落址であるが、建物址1棟、墓壙1基、小豎穴1基の検出がある。

当地方の平安時代の集落址において、すでに報告書を刊行した堤之尾根遺跡と長峰遺跡で住居址は検出できるが、貯蔵穴や墓穴を検出できることへの疑問を述べたことがある。本遺跡では、それぞれ1基と少ないが墓壙と小豎穴を検出することができた。この発見は当地方における平安時代の集落址研究上の好資料になろう。

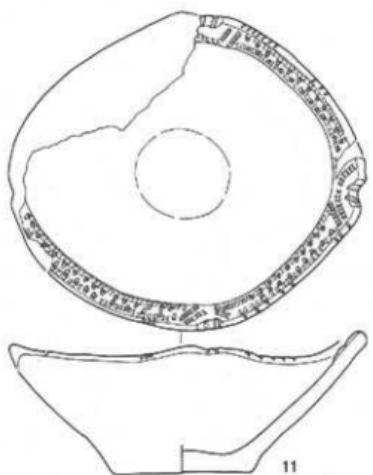
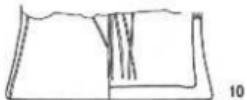
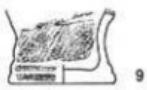
最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

参考文献

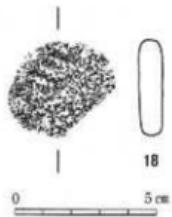
- 1974 諏訪清陵高等学校地歴部考古班「中尾根遺跡」(『土』8)
- 1976 長野県教育委員会『昭和50年度 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書茅野市・原村その1、富士見町その2』
- 1980 長野県教育委員会『昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』
- 1985 原村役場『原村誌 上巻』
- 1991 原村教育委員会『原村の埋蔵文化財19 御射山道北・古屋敷西・堤之尾根遺跡 御射山地区県営畑地帯総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査報告書』
- 1992 原村教育委員会『原村の埋蔵文化財20 長峰遺跡 平成3年度県営は場整備事業丸山地区に伴う緊急発掘調査報告書』
- 1995 原村教育委員会『原村の埋蔵文化財34 宿尻遺跡(第2次発掘調査) 平成6年度県営は場整備事業原村西部地区に伴う緊急発掘調査報告書』



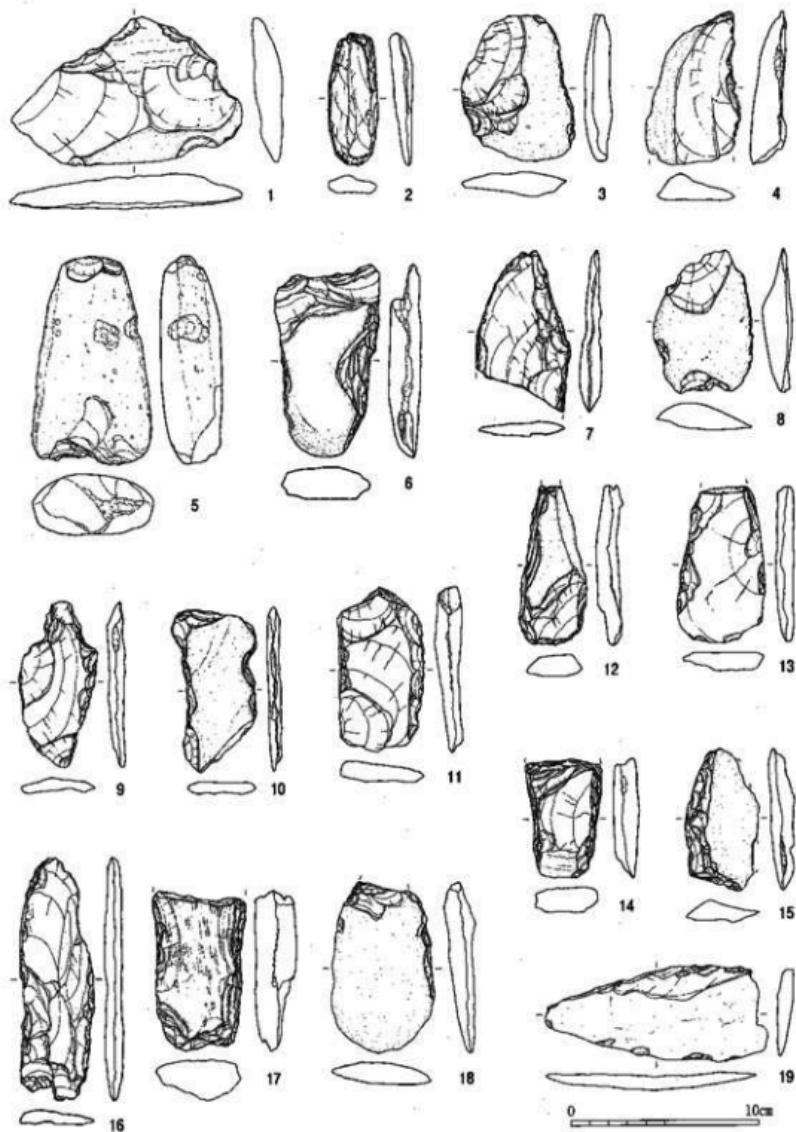
第7図 繩文土器拓影・実測図 (1・2 1:2、3~8 1:4)



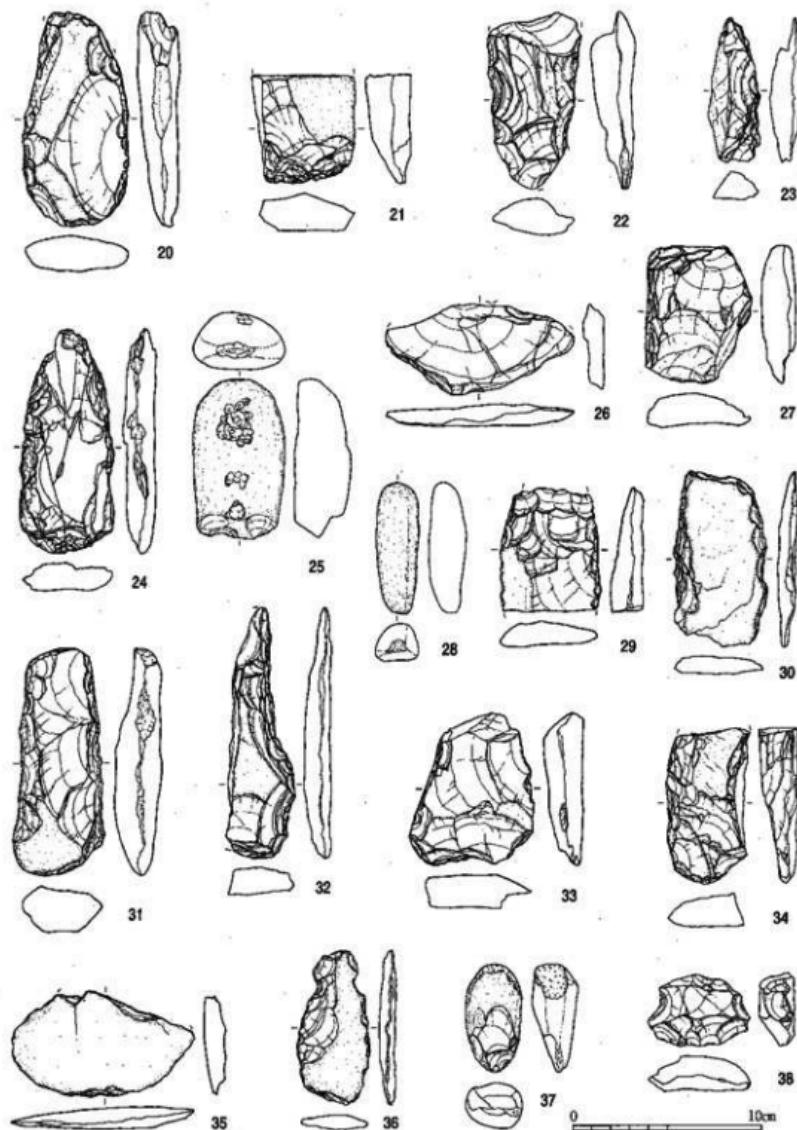
0 10cm



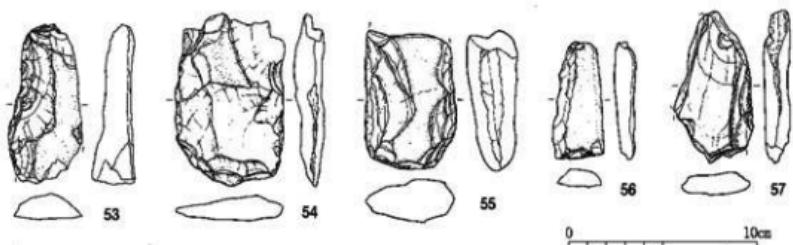
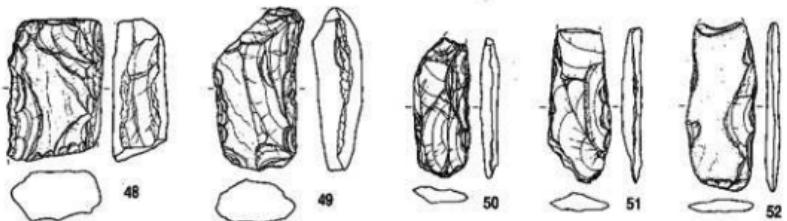
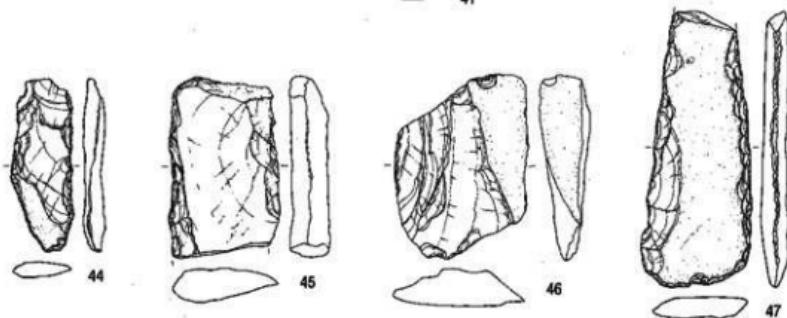
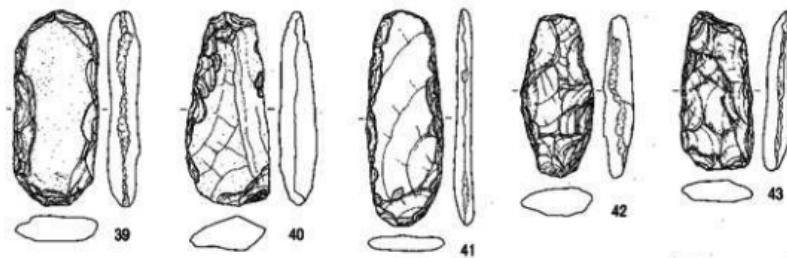
第8図 繩文土器・土製品実測図 (9~12 1:4、13~18 1:2)



第9図 石器実測図（1：3） その1



第10図 石器実測図 (1 : 3) その2



0 10cm

第11図 石器実測図 (1 : 3) その3

表3 小豎穴一覧表

表中のカッコ付けの数値は、現存部分を示す

番号	検出位置	平面形	規 模			遺構の特徴・出土遺物等
			長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	
1	DB-43	円 形	103.0	102.0	43.0	発
2	DB-42	隅丸方形	60.0	58.0	16.5	
3	CY-42 CY-43	長 方 形	103.0	74.0	31.0	磨石1
4	CY-39	椭 圆 形	73.0	(30.0)	(23.0)	水田の法面、上部と南側欠損
5	CS-38 CS-39 CT-39	椭 圆 形	110.0	92.0	(56.0)	水田の法面、上部を欠損、一部袋状、礫
6	DF-46 DG-46	円 形	77.0	70.0	35.0	
7	DG-45 DG-46	長 楕 圆 形	70.0	45.0	15.0	
8	DD-40 DD-41 ほか	円 形	93.0	88.0	31.5	6号豎穴住居址と重複、縄文時代中期土器破片1、黒曜石剥片2
9	CX-39 CX-40	不整椭円形	76.0	67.0	35.0	
10	CY-40 DA-39 DA-40	円 形	77.0	75.0	25.0	
11	CR-42 CS-42	円 形	102.0	101.0	74.0	8号・9号豎穴住居址と重複、本址が新しい、縄文時代中期土器破片4、石錐1、礫
12	CI-41 CI-42	円 形	128.0	122.0	47.0	
13	CD-40 CE-40	円 形	93.0	(87.0)	47.5	縄文時代中期土器破片1、黒曜石剥片1、礫
14	BY-37 BY-38	椭 圆 形	98.0	81.0	35.0	
15	BY-36 BY-37	円 形	122.0	122.0	38.0	縄文時代中期土器破片2
16	DB-44 DC-44	円 形	88.0	83.0	33.0	
17	DB-44 DB-45	隅丸長方形	98.0	78.0	10.0	焼土
18	CD-43	椭 圆 形	90.0	80.0	16.0	
19	CC-44 CC-45 ほか	不整円形	122.0	120.0	35.0	
20	CO-45 CO-46	円 形	114.0	102.0	41.0	
21	CN-46	椭 圆 形	100.0	77.0	25.0	凹石1
22	CH-45 CI-45	不整円形	96.0	96.0	27.0	
23	CF-41 CF-42 CG-42	不整椭円形 (薬形)	165.0	109.0	59.0	小豎穴25と重複
24	CF-41 CG-41	椭 圆 形	81.0	63.0	29.5	小豎穴25と重複、平安時代土師器破片6、縄文時代中期土器破片2、黒曜石剥片2、礫
25	CF-41 CF-42 ほか	椭 圆 形	195.0	97.0	22.5	小豎穴23・24と重複

26	C I - 42 C I - 43	不整楕円形	61.0	45.0	21.0	
27	C C - 36	円 形	122.0	(69.0)	26.0	18号竪穴住居址と重複、小竪穴 2基が重複か 墓壙 2
28	欠番					
29	B U - 48 B V - 48	不整楕円形	88.0	78.0	16.5	
30	B U - 48	円 形	95.0	86.0	33.5	縄文時代中期土器破片 2
31	B T - 49 B T - 50 ほか	楕 圓 形	117.0	106.0	26.0	縄文時代中期土器破片 1、黒曜石剥片 1、 剥片 2
32	B U - 43	不整楕円形	110.0	100.0	14.0	16号竪穴住居址と重複、底面にピット、 縄文時代中期土器破片 1、黒曜石剥片 1、 礫
33	B V - 55	不整楕円形	125.0	(144.0)	37.5	2基の小竪穴が重複か、黒曜石剥片 1
34	B U - 55	円 形	102.0	102.0	24.5	縄文時代中期土器下唇部 1 (第8図9)、 破片 24、黒曜石剥片 2、剥片 1
35	B T - 55	不 整 円 形	94.0	89.0	22.0	縄文時代中期土器破片 2、黒曜石剥片 2
36	B S - 55 B T - 55 B T - 56	楕 圓 形	126.0	106.0	42.5	縄文時代中期土器破片 45、磨石 1、黒曜 石剥片 2、不明 8、礫
37	B T - 56 B T - 57 ほか	不整楕円形	80.0	65.0	14.5	
38	B S - 55 B T - 54 B T - 55	不 整 円 形	115.0	(103.5)	33.0	小竪穴 47と重複、縄文時代中期土器破片 1、黒曜石剥片 2
39	B S - 54 B S - 55	不 整 円 形	80.0	76.0	26.0	縄文時代中期土器破片 5、黒曜石剥片 2、 礫
40	B R - 54 B R - 55 ほか	楕 圓 形	115.0	99.0	20.0	縄文時代中期土器破片 5、打製石斧 2 (第10図21)、礫
41	B S - 54	不 整 円 形	73.0	65.0	21.0	縄文時代中期土器破片 2
42	B S - 54	不 整 円 形	80.0	72.0	19.5	縄文時代中期土器破片 13、黒曜石剥片 4、 礫
43	B S - 53	不 整 形	66.0	60.0	13.0	
44	B S - 52 B S - 53	不 整 円 形	92.0	83.0	17.5	縄文時代中期土器破片 3
45	B T - 57 B T - 58 B U - 57	円 形	79.0	76.0	13.5	縄文時代中期土器破片 2、黒曜石剥片 1、 剥片 1
46	B U - 57	不 整 形	130.0	119.0	33.5	縄文時代中期土器破片 1、黒曜石剥片 1、 礫
47	B T - 54 B T - 55	不 整 円 形	74.0	(59.0)	9.0	小竪穴 38と重複
48	B U - 54 B U - 55	不整楕円形	60.0	56.0	17.0	縄文時代中期土器破片 2
49	B P - 54 B P - 55	楕 圓 形	48.0	40.0	9.0	
50-A 50-B ほか	B U - 56 B U - 57	楕 圓 形 不 整 円 形	(86.0) 94.0	(71.0) (70.0)	43.5 15.0	2基の小竪穴が重複、縄文時代中期土器 破片 3、剥片 1
51	B R - 50	不 整 円 形	82.0	70.0	18.0	剥片 3
52	B Q - 50 B Q - 51	隅丸 方形	78.0	67.0	25.5	

53	B P - 50 B Q - 50	不整円形	108.0	95.0	41.5	縄文時代中期土器破片12、打製石斧2 (第10図22・23)、黒曜石剥片5、剥片2、 礫
54	B P - 54 B P - 55 ほか	椭円形	51.0	(39.0)	25.5	小堅穴55と重複、黒曜石剥片2
55	B P - 54	不整椭円形 (繭形)	82.0	50.0	13.5	小堅穴54と重複、小堅穴2基の重複
56	B P - 55	不整円形	56.0	53.0	13.5	
57	B J - 48	不整椭円形	70.0	61.0	22.0	
58	B J - 48 B J - 49 ほか	不整椭円形	71.0	58.0	21.0	
59	B J - 49 B J - 50	不整円形	80.0	71.0	22.5	縄文時代中期土器破片3、剥片2、礫
60	B H - 49	円形	66.0	58.0	18.5	打製石斧1 (第10図24)、剥片2
61	B H - 50 B I - 50	椭円形	103.0	76.0	68.0	柱模痕、縄文時代中期土器破片3
62	B H - 50	不整円形	89.0	82.0	42.0	縄文時代中期土器破片3、黒曜石剥片2、 礫
63	B G - 50 B G - 51 ほか	椭円形	109.0	93.0	49.0	縄文時代中期土器破片8、礫
64	B H - 50 B H - 51 ほか	円形	65.0	60.0	35.0	縄文時代中期土器破片2
65	B F - 53 B F - 54	椭円形	110.0	86.0	13.0	26号堅穴住居址と重複、黒曜石剥片1
66	B E - 53 B F - 53	椭円形	91.0	78.0	20.0	26号堅穴住居址と重複、剥片4、礫
67	B P - 56	不整円形	51.0	50.0	20.0	縄文時代中期土器破片14
68	B P - 57	椭円形	120.0	90.0	19.0	底面に小ピット、縄文時代中期土器破片 1、剥片1
69	B P - 57 B P - 58 ほか	不整椭円形 (繭形)	94.0	63.0	22.0	黒曜石剥片1、礫
70	B P - 57	不整円形	42.0	40.0	17.0	
71	B O - 58	椭円形	124.0	108.0	26.0	縄文時代中期土器破片6、横刃形石器、 1 (第10図26)、凹石・叩石1 (第10図 25)、黒曜石剥片2、礫
72	B N - 57 B N - 58	円形	92.0	90.0	73.0	柱穴か、黒曜石剥片2、剥片2
73	B N - 58	椭円形	(105.0)	83.0	22.5	小堅穴74と重複、縄文時代中期土器破片 1
74	B N - 58 B N - 59	椭円形	(117.0)	102.0	18.0	小堅穴73と重複
75	B M - 58 B M - 59	隅丸長方形	99.0	86.0	13.5	
76	B L - 60 B M - 60	椭円形	108.0	92.0	24.0	縄文時代中期土器破片50、後期土器破片 2、打製石斧1 (第10図27)、黒曜石剥 片1、礫
77	B L - 59	不整円形	80.0	75.0	15.5	黒曜石剥片1
78	B L - 58 B M - 58	不整円形	118.0	111.0	53.0	縄文時代中期土器破片5、黒曜石剥片1
79	B L - 57	椭円形	83.0	74.0	29.0	縄文時代中期土器破片2、黒曜石剥片2

80	B O - 56 B O - 57	不整円形	68.0	65.0	48.0	
81	C V - 44 C V - 45 ほか	椭円形	85.0	56.0	42.0	縄文(石組)
82	B O - 52 B O - 53	不整円形	55.0	50.0	36.5	
83						縄文時代中期土器破片2
84						
85						
86						縄文時代中期土器破片4、黒曜石剥片1
87						縄文時代中期土器破片1
88	B D - 52 B E - 52 B E - 53	不整円形	111.0	104.0	26.5	縄文時代中期土器破片13、検出面で石皿の破損品1、黒曜石剥片6、縄
89	B D - 52	円形	92.0	85.0	70.0	縄文時代中期土器破片13、凹石1、黒曜石剥片3、縄
90	B C - 52	円形	74.0	70.0	49.5	縄文時代中期土器破片1
91	B H - 51 B H - 52	椭円形	80.0	75.0	33.0	黒曜石剥片2
92	B I - 51 B I - 52	椭円形	102.0	78.0	24.5	黒曜石剥片2
93	B H - 52 B H - 53 ほか	椭円形	91.0	76.0	45.0	
94	B I - 52 B I - 53 ほか	椭円形	104.0	98.0	38.0	叩石1(第10図28)、縄
95	B H - 53	不整円形	86.0	81.0	24.0	黒曜石剥片1
96	B O - 52	円形	68.0	61.0	29.5	
97	B O - 53 B P - 53	不整椭円形	85.0	71.0	37.0	2基の小豎穴が重複か、底面は2段に落ち込む、縄文時代中期土器破片1、黒曜石剥片3
98	B V - 47 B V - 48	椭円形	54.0	47.0	7.0	
99	B N - 45	椭円形	102.0	64.0	26.0	
100	B L - 46 B M - 46	不整形	90.0	78.0	13.0	縄文時代中期土器破片4、検出面で縄
101	B T - 38	隅丸方形	79.0	73.0	30.0	
102	B B - 52 B B - 53 ほか	不整椭円形	128.0	100.0	37.0	2基の小豎穴が重複か
103	B D - 57 B E - 57	不整椭円形	132.0	113.0	31.0	縄文時代中期土器破片2、黒曜石剥片4、縄
104	C F - 40 C F - 41 ほか	椭円形	142.0	76.0	36.0	11・12号豎穴住居址と重複、本址が新し
105	C A - 39 C B - 39	椭円形	66.0	57.0	17.0	
106	B Y - 38 B Y - 39 ほか	不整円形	114.0	110.0	34.5	
107	B Y - 39 C A - 39	不整円形	77.0	75.0	31.5	縄文時代中期土器破片11、黒曜石剥片5
108	C A - 40 B Y - 40	不整円形	131.0	120.0	79.0	縄文時代中期深鉢1(第8図12)、立石?1、不明1

109	B U - 42 B U - 43	不整円形	(78.0)	(78.0)	23.0	疊
110	B P - 55	楕円形	67.0	60.0	23.5	
111	B P - 55 B P - 56	楕円形	90.0	64.0	19.5	
112	B O - 55 B P - 55	楕円形	65.0	52.0	20.0	
113	B O - 55	楕円形	93.0	58.0	30.5	
114	B O - 54 B O - 55	楕円形	(58.0)	52.0	24.5	小堅穴143・144と重複、縄文時代中期土器破片3
115	B I - 58	不整楕円形	106.0	93.0	36.5	
116	B G - 53 B G - 54	不整楕円形	76.0	63.0	42.0	底面は2段に落ち込む、縄文時代中期土器破片3
117	B G - 53	不整楕円形	63.0	45.0	34.0	底面は2段に落ち込む、黒曜石剥片1
118	B I - 60 B J - 60 B J - 61	楕円形	(157.0)	(40.0)	31.0	半分位の調査残りは用地外、2基の小堅穴が重複か、疊
119	B K - 60	楕円形	(80.0)	97.0	33.0	小堅穴138と重複、底面は2段に落ち込む、縄文時代後期土器破片16、石塚1
120	B J - 59 B J - 60	楕円形	153.0	(126.0)	47.5	小堅穴121と重複、縄文時代中期初頭深鉢下脇部1(第8図10)、浅鉢1(第8図11)、中期土器破片5
121	B J - 59 B J - 60 ほか	不整円形	141.0	(126.0)	28.5	小堅穴120・122と重複
122	B K - 59	楕円形	100.0	(65.0)	26.0	小堅穴121と重複
123	B K - 59 B L - 59	不整楕円形	63.0	49.0	9.5	
124	B J - 59 B J - 60	楕円形	49.0	44.0	65.0	柱穴?、縄文時代後期土器破片2
125	B J - 59	不整円形	92.0	86.0	38.0	
126	B J - 57 B J - 58	不整円形	87.0	83.0	42.0	
127	B O - 53	楕円形	54.0	44.0	17.5	磨石1、疊
128	B W - 43	不整円形	84.0	75.0	16.0	疊
129						
130	B U - 42 B V - 42	不整円形	70.0	67.0	8.0	
131	B F - 52 B G - 52	不整円形	106.0	104.0	34.0	黒曜石剥片1、剥片1、疊
132	B F - 51	楕円形	50.0	48.0	43.0	小堅穴133と重複、底面に小ピット、縄文時代中期土器破片1、黒曜石剥片17
133	B F - 51	楕円形	180.0	116.0	34.5	小堅穴132と重複、縄文時代中期土器破片2、凹石1、黒曜石剥片11、剥片1
134	B N - 57	不整円形	54.0	53.0	19.0	
135	B E - 50 B E - 51 ほか	不整円形	79.0 41.0	(50.0) 33.0	21.0 29.0	2基の小堅穴が重複?
136	B M - 60	円形	85.0	80.0	48.5	打製石斧1(第10図29)、疊
137	B M - 60 B M - 61	楕円形	106.0	75.0	47.0	底面は2段に落ち込む、縄文時代中期土器破片3、黒曜石剥片1
138	B J - 60 B J - 61 B K - 60	不整楕円形	(180.0)	102.0	46.5	小堅穴119と重複、2基の小堅穴が重複?、凹石1
139	B S - 37	隅丸長方形	108.0	69.0	26.0	小堅穴140と重複
140	B S - 37	楕円形	74.0	(50.0)	14.0	小堅穴139・141と重複

141	B R - 36 B R - 37 ほか	不整楕円形	(142.0)	116.0	26.0	小豎穴140と重複
142	B X - 40 B Y - 40 B Y - 41	楕円形	140.0	106.0	31.0	
143	B O - 55	楕円形	(60.0)	51.0	21.0	小豎穴114・144と重複
144	B N - 54 B N - 55 ほか	楕円形	65.0	(40.0)	35.5	小豎穴114・143と重複、底面は2段に落ち込む
145	BM - 55 BN - 55	楕円形	103.0	62.0	36.5	底面にピット、黒曜石剥片4
146	BM - 55 BN - 54 BN - 55	不整楕円形	80.0	68.0	26.5	縄文時代中期土器破片3、黒曜石剥片4
147	BM - 54	不整円形	111.0	100.0	9.0	
148	BN - 53 BN - 54	不整円形	(140.0)	125.0	16.0	小豎穴149と重複、2基の小豎穴が重複?、黒曜石剥片1
149	BM - 53 BM - 54 ほか	不整楕円形	(100.0)	66.0	26.0	小豎穴148と重複
150	BN - 52 BN - 53	不整楕円形 (繭形)	140.0	102.0	7.0	黒曜石剥片1、繭
151	BM - 57 BN - 57	不整円形	56.0	56.0	17.5	柱穴?
152	BL - 56 BL - 57 ほか	楕円形	108.0	91.0	29.5	小豎穴153と重複、黒曜石剥片3
153	BM - 57	楕円形	(61.0)	38.0	13.5	小豎穴152と重複
154	BM - 56 BN - 56	円形	49.0	49.0	14.0	
155	BN - 56	不整円形	93.0	90.0	26.5	
156	BM - 55 BM - 56	円形	56.0	56.0	27.0	柱穴?
157	BL - 55 BL - 56 ほか	隅丸方形	75.0	61.0	47.0	柱穴?、底面は2段に落ち込む、繭
158	BL - 56	不整円形	53.0	(48.0)	9.5	小豎穴159と重複、柱穴?
159	BL - 56	不整円形	(73.0)	71.0	29.0	小豎穴158と重複、柱穴?
160	B K - 56 BL - 56	楕円形	90.0	71.0	33.5	繭
161	B K - 56 BL - 56	楕円形	57.0	47.0	45.0	柱穴?、底面は2段に落ち込む
162	B K - 56 BK - 57	楕円形	56.0	45.0	26.0	柱穴?、縄文時代中期土器破片1
163	B K - 55 BK - 56	円形	55.0	54.0	34.0	柱穴?
164	B I - 55 BI - 56	楕円形	141.0	(100.0)	38.5	小豎穴78と重複、縄文時代中期土器破片1、打製石斧1(第10図30)、繭
165	B J - 55 BK - 54 BK - 55	楕円形	154.0	117.0	26.0	小豎穴166と重複、埋設土器
166	B J - 55 BK - 55	円形	40.0	40.0	56.0	小豎穴165と重複、柱穴?
167	B K - 55 BL - 54 BL - 55	不整形	141.0	(108.0)	23.0	小豎穴168と重複、検出面で焼土、繭

168	B K - 55 B L - 55	椭 円 形	82.0	(43.0)	14.0	小堅穴167と重複、縄文時代中期土器破片1、黒曜石剥片1、礫
169	B L - 54 B L - 55 B M - 54	不整椭円形	139.0	110.0	23.0	小堅穴170と重複、縄文時代中期土器破片12、黒曜石剥片5、礫
170	B L - 54 B M - 54	円 形	46.0	46.0	62.0	小堅穴169と重複、柱穴?
171	B M - 54	不整椭円形 (椭形)	82.0	48.0	30.0	
172	B L - 53 B M - 53	円 形	85.0	75.0	56.5	小堅穴173と重複、縄文時代中期土器破片3
173	B L - 53 B L - 54 ほか	不 整 形	120.0	85.0	16.5	小堅穴173・174と重複、縄文時代後期土器破片2
174	B M - 53	不 整 円 形	71.0	(56.0)	20.5	小堅穴173と重複
175	B K - 54 B L - 54	椭 円 形	56.0	46.0	21.0	
176	B L - 54	円 形	56.0	56.0	36.5	柱穴?、礫
177	B L - 53 B L - 54	椭 円 形	61.0	51.0	21.5	底面は2段に落ち込む
178	B H - 55 B I - 55	円 形	90.0	90.0	16.0	小堅穴164と重複、礫
179	B I - 59	椭 円 形	85.0	64.0	31.5	一部は圓場整備予定地外
180	B D - 42 B D - 43 ほか	円 形	90.0	80.0		

写真図版 1



写真1 調査区遠景（北から）

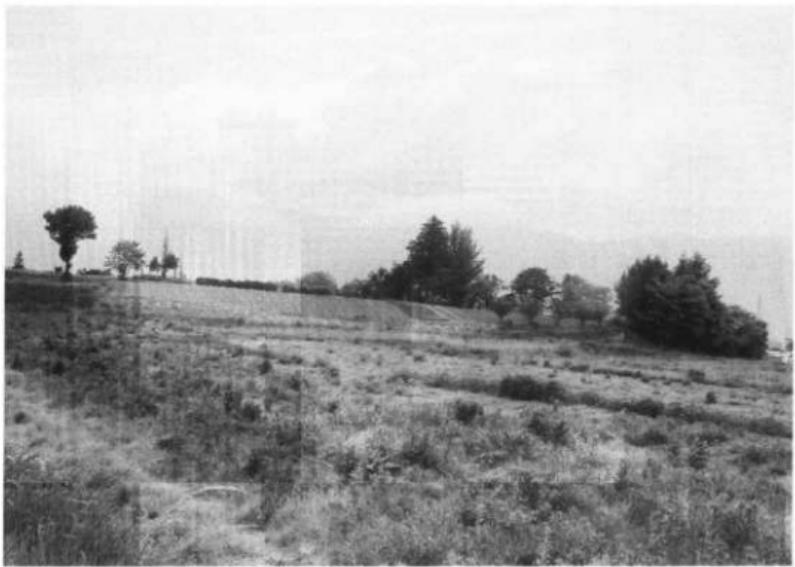


写真2 調査区遠景（北から）

写真図版 2

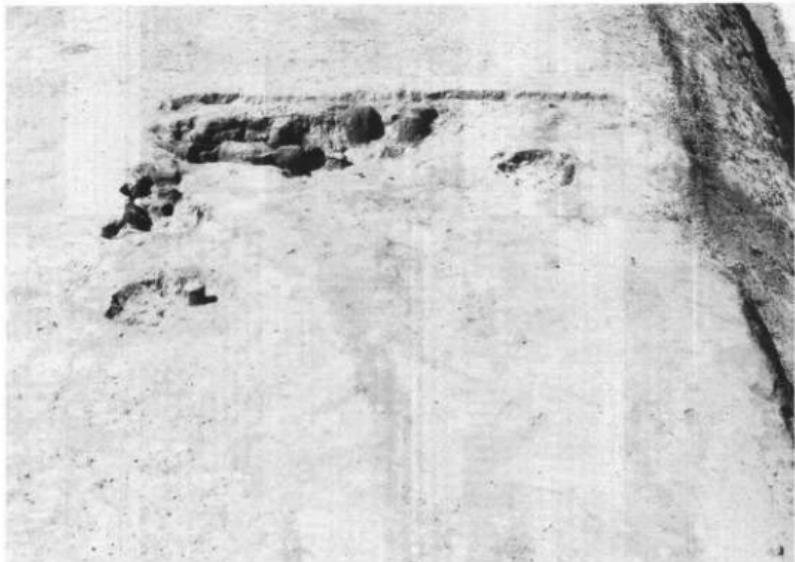


写真3 第1号堅穴住居址（東から）

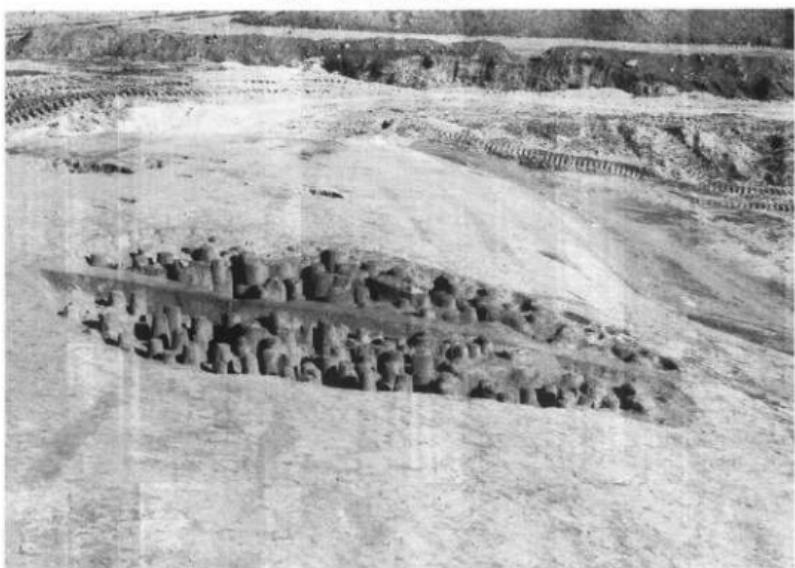


写真4 第2・3・4号堅穴住居址（西から）



写真5 第2・3・4号竪穴住居址（南から）

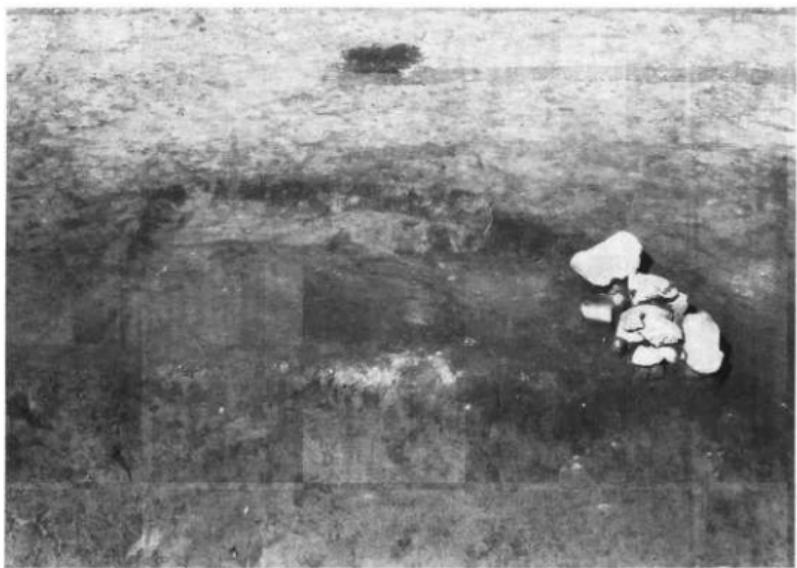


写真6 第5・7号竪穴住居址（南から）

写真図版 4

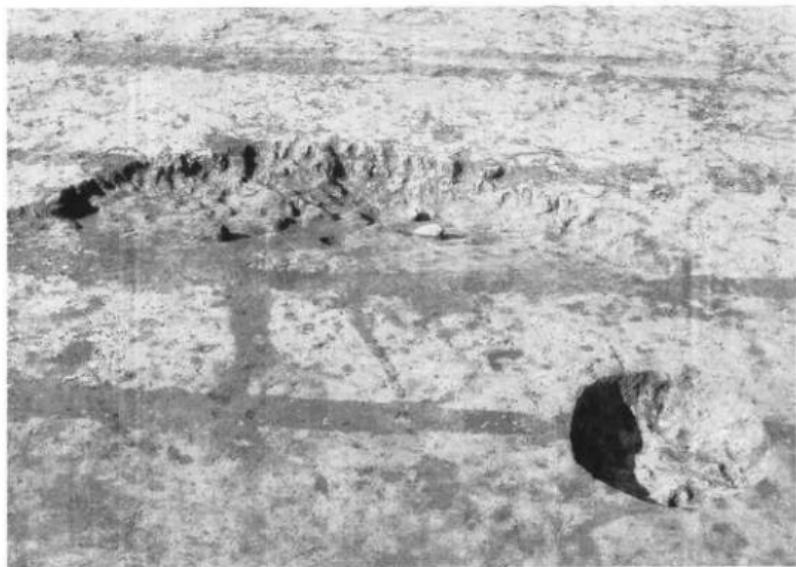


写真7 第6号竪穴住居址（南から）

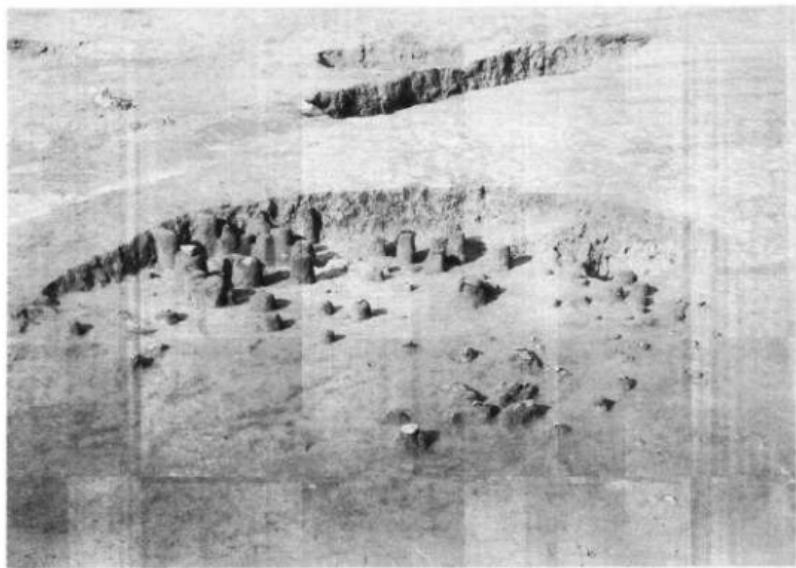


写真8 第8・9号竪穴住居址（南から）

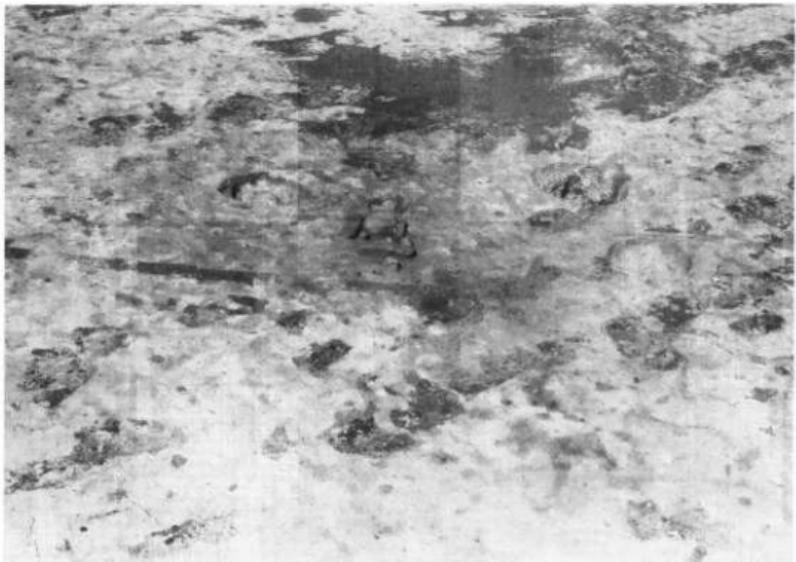


写真9 第10号竪穴住居址（南から）

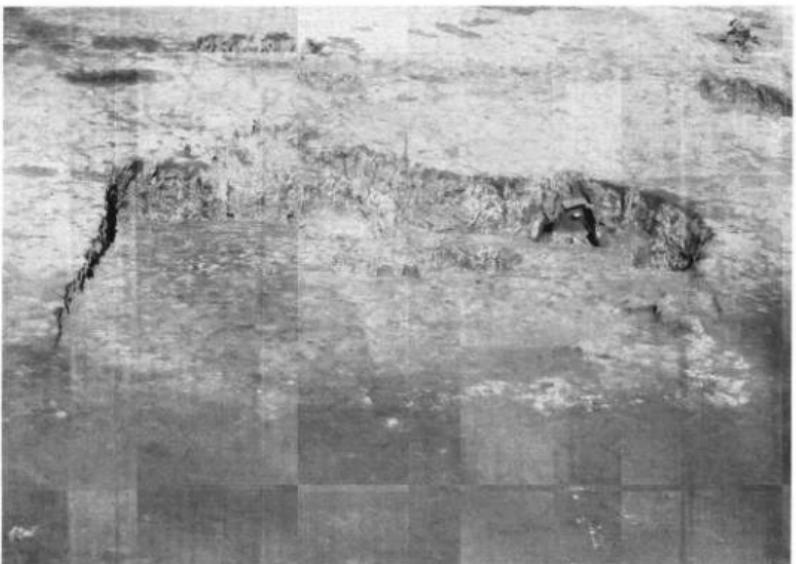


写真10 第11・12号竪穴住居址（南から）

写真図版 6

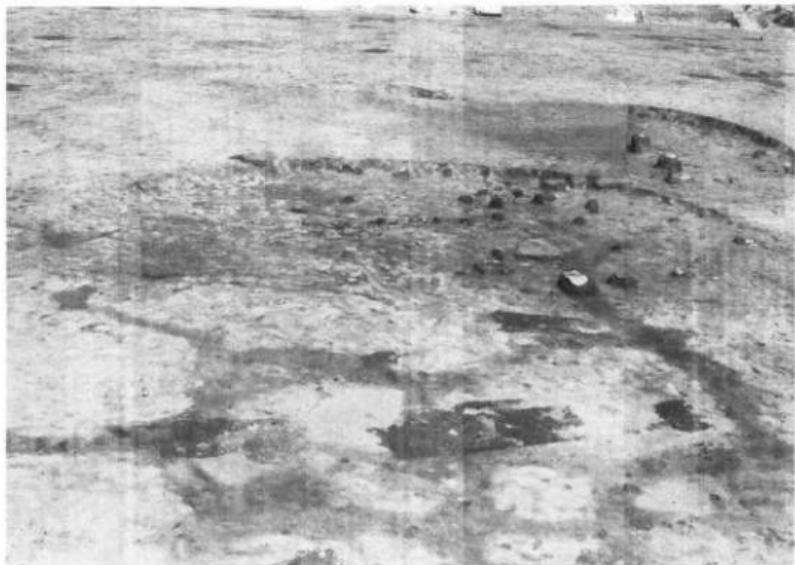


写真11 第13・14・15号竪穴住居址（南から）

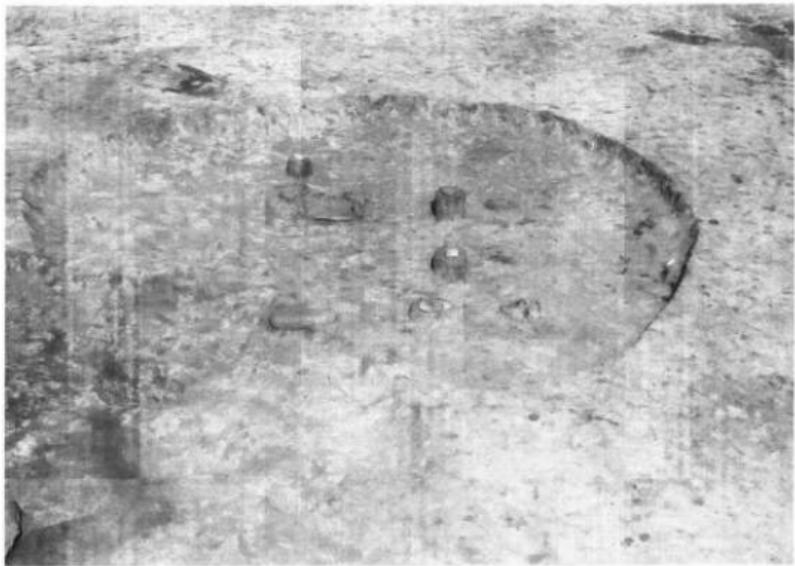


写真12 第15号竪穴住居址（南から）

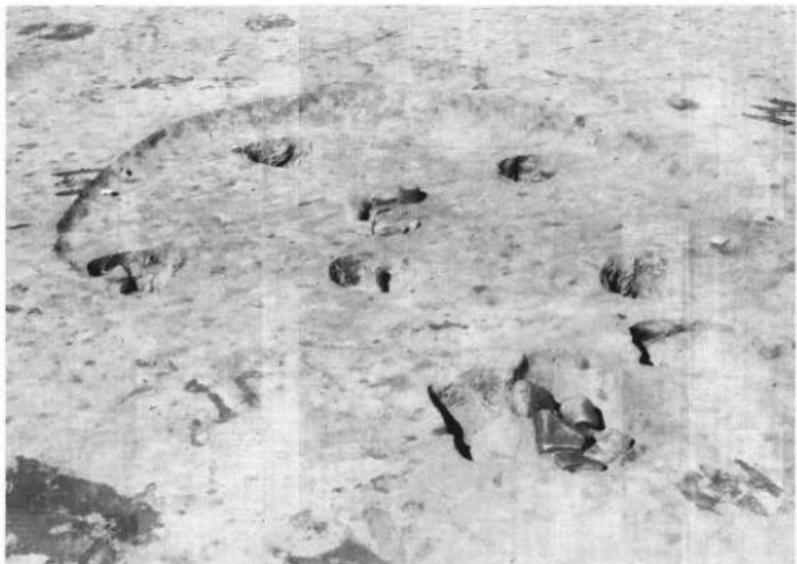


写真13 第16号堅穴住居址（南から）



写真14 第18号堅穴住居址（南から）

写真図版 8

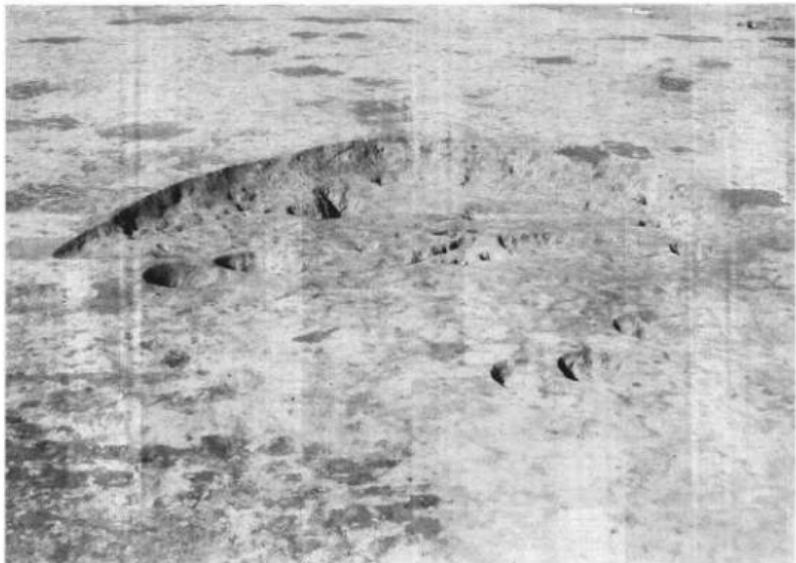


写真15 第19号竪穴住居址（南から）



写真16 第20号竪穴住居址（南から）



写真17 第21号堅穴住居址（西から）

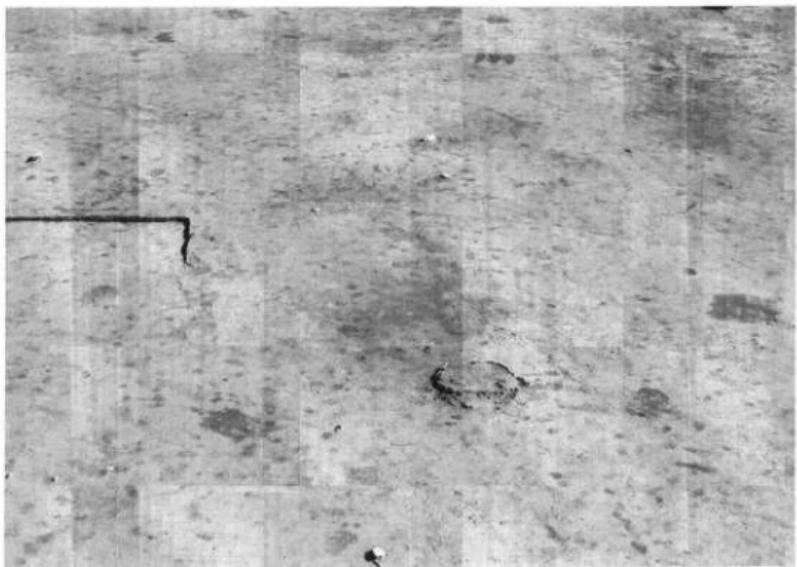


写真18 第22号堅穴住居址（西から）

写真図版10



写真19 第26号竪穴住居址（西から）

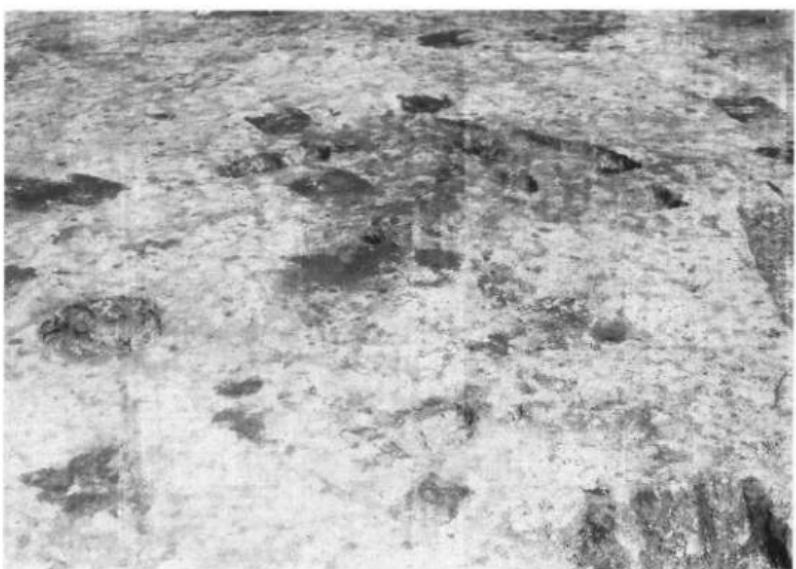


写真20 第27号竪穴住居址（南から）

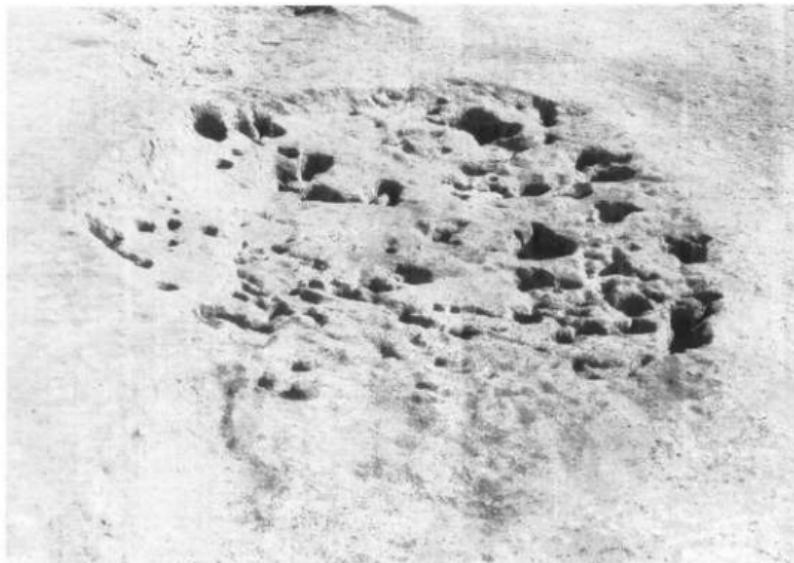


写真21 第28・29・30号竪穴住居址（西から）

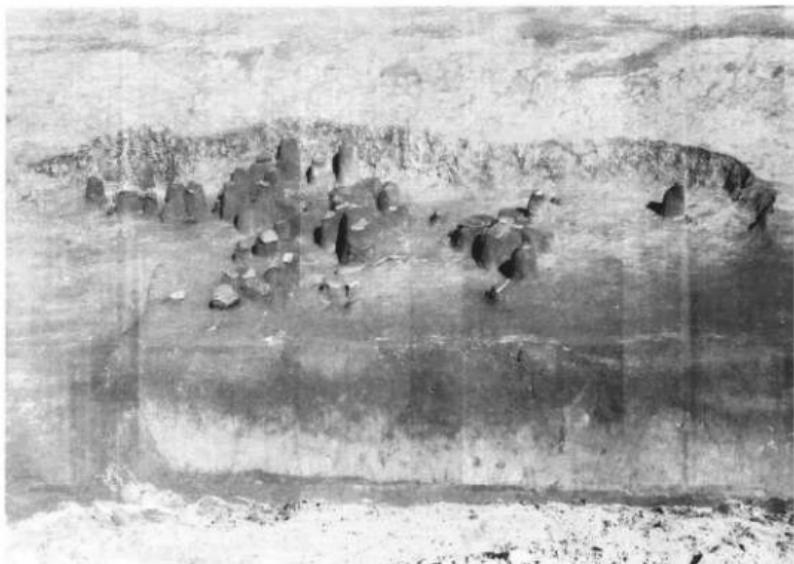


写真22 第31・32・33号竪穴住居址（南から）

写真図版12

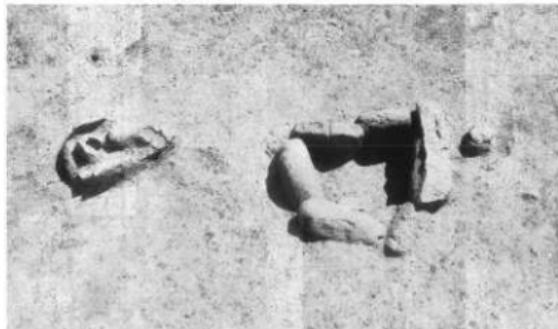


写真23

第10号竪穴住居址
石圓炉と遺物出土状態
(西から)



写真24

第11号竪穴住居址
カマド (南から)



写真25

第13号竪穴住居址
埋甕炉 (南から)

写真26
第15号竪穴住居址
石圓炉（東から）



写真27
第16号竪穴住居址
土器埋設石圓炉（東から）

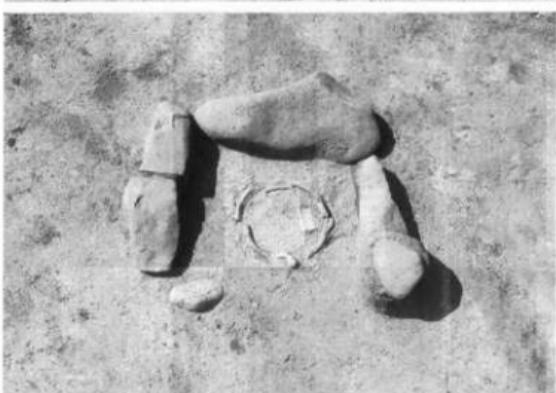


写真28
第21号竪穴住居址
埋甕炉（西から）



写真図版14



写真29

第22号竪穴住居址
埋壺炉（西南から）



写真30

第29号竪穴住居址
埋壺炉（南から）



写真31

第30号竪穴住居址
埋壺炉（南から）

写真32
小豎穴61
柱痕址（北から）



写真33
小豎穴108（西から）

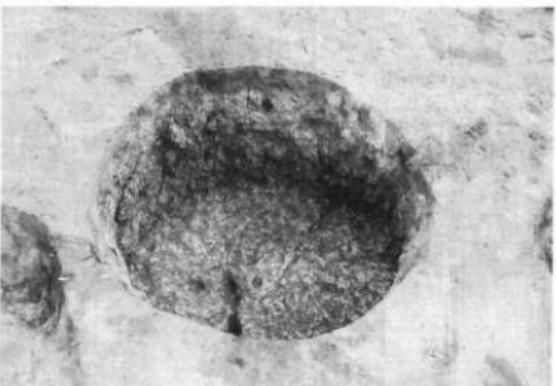
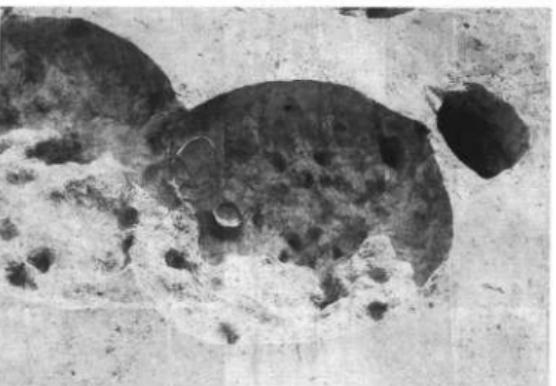


写真34
小豎穴120（北から）



写真図版16



写真35
小堀穴120（北から）

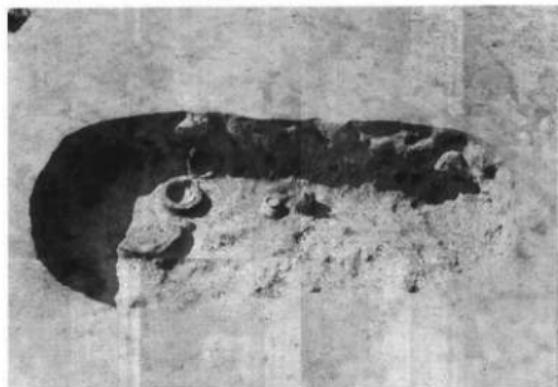


写真36
墓塚2（東から）



写真37
発掘風景（西から）

報告書抄録

ふりがな	なかおねいせき						
書名	中尾根遺跡						
調査名	平成7年度 県営圃場整備事業原村西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	原村の埋蔵文化財						
シリーズ番号	39						
編著者名	平出一治						
編集機関	原村教育委員会						
所在地	〒391-01 長野県諏訪郡原村6549番地1 TEL 0266-79-2111						
発行年月日	西暦 1996年03月						
所取遺跡	所在地	コード	北緯度分秒	東経度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 遺跡番号					
中尾根	長野県諏訪郡 原村室内	3637	55	35度 57分 38秒	138度 12分 45秒	19950522 19951218	平成7年度 県営圃場整 備事業原村 西部地区
所以遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
中尾根	集落跡	绳文時代 前期 中期	堅穴住居址	28軒	绳文時代 土器、石器、 土製品	平安時代集落から墓塚1基が発見された。当地方 における集落研究上の好 資料となる	
		平安時代 後期	堅穴住居址 建物跡 墓塚	5軒 1棟 1基	平安時代 土師器、須恵器、 灰釉陶器、 鉄製品		
		近世	墓塚	1基	人骨、古鏡・ 寛永通宝、不明 金属製品		

調査組織

中尾根遺跡発掘調査団名簿

團 長 平林 太尾（原村教育委員会教育長 平成7年4月～7月22日）

大館 宏（原村教育委員会教育長 平成7年7月23日～）

調査担当者 平出 一治

調査員 平林とし美 石川美樹

調査参加者 発掘作業 清水 正進 小松 弘 坂本ちづる 宮坂とし子

五味八代江 平林 途雄 西沢 寛人 清水 健郎

中村きみゑ 小林 ミサ 清水としみ 清水みち子

鎌倉きふみ 日達今朝江 津金喜美子 進藤 郁代

小池 芳久 吉川 幸子 家中 光恵

整理作業 津金喜美子 坂本ちづる 進藤 郁代 (順不同)

事務局 原村教育委員会事務局 平林今朝二（教育次長）

大口美代子（庶務係長） 宮坂 道彦（主任）

伊藤 佳江 平出 一治 平林とし美 石川 美樹

原村の埋蔵文化財39

中尾根遺跡

平成7年度 累営圃場整備事業原村西部地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成8年3月

発行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所 日本ハイコム株式会社

